

かけがわ学力向上ものがたり
— 我が校のものがたり 実践編 —



「茶のみやきんじろう」©掛川市

令和5年2月
掛川市教育委員会

「子どもたちの未来のために」

「ここが分からない。〇〇さん、教えて。」「これがこうだから、こうじゃん。どうかな?」「なるほど。分かった。」「あれ?じゃあここをこうしたらどうかな?」「あ、それもいいね。それでもいいじゃん。」

教室では、子どもたちが自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりしながら、様々な問題を解決しようとして一生懸命取り組んでいます。そこには、一人一人の子どもの「ものがたり」があります。そして、そのものがたりを支える先生の「ものがたり」もあります。

掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを、学校、家庭、地域で共通理解し、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。さらに、変化の激しい時代を生きる掛川市の子どもたちに付けたい「創像力」「創合力」「創律力」からなる未来を切り拓く「3つの創る力」を令和3年度に策定し、その育成に重点を置きました。

学校では、夢に向かって自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につながるよう、日々の実践の中で、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指しています。本年度も、児童生徒の学習状況に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、「3つの創る力」育成への積極的な授業改善を進めてきました。

この度、本年度の「我が校のものがたり」による実践の中で、特に成果が表れた代表的な実践をまとめ、一冊の本にすることができました。各学校並びに、実践報告を御提出いただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、心から感謝申し上げます。子どもたちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子どもたちの充実した学びの姿が想像できます。

今後も、掛川の子どもたちの「3つの創る力」育成に向けて、学校、家庭、地域、教育委員会が連携して、子どもたちの未来のための教育活動の充実に努めてまいります。

目 次

日坂小学校 諸星 江里	1
深い学びを引き起こす、主体的な学び合いのある授業を目指して	
東山口小学校 廣住 悠乃	3
教科の見方・考え方を働かせて学び合う	
西山口小学校 渡辺 智美	5
作ろう！縄跳びの連続技	
上内田小学校 石田 智子	7
自ら・みんなと繋がって学ぶ楽しさをひろげたタブレット活用	
城北小学校 鈴木 陽子	9
学びが深まる授業をめざして	
第一小学校 山崎 崇斗	11
1人1台端末の効果的な活用をめざして	
第二小学校 鈴木 大介	13
根拠をもとにした対話を通して学びを深めていくために	
中央小学校 岡本 慎也	15
学びを深める子の育成 ～2年間の算数の実践を通して～	
曾我小学校 永田 和輝	17
曾我をプロデュース・・・どんなことを？誰に？何のために？	
桜木小学校 石津 まりこ	19
子どもが主役！自ら学ぶ授業をめざして	
和田岡小学校 小長井 奎佑	21
一步ふみだす和田岡っ子	
原谷小学校 川隅 翔太	23
宿題を変えると授業も変わる！	
原田小学校 細野 雅希	25
進めっ！原野谷川を守り隊！！	
西郷小学校 松井 瑠美	27
自らが学び続ける授業を目指して	
倉真小学校 池田 勇太	29
「～たい」でいっぱい倉真っ子！	

土方小学校	平松 哲也	3 1
3匹のカエルとアップする子どもたち		
佐束小学校	池田 紀子	3 3
保健の授業も対話を通して深める		
中小学校	深谷 享平	3 5
自分事として取り組み、学びの過程を楽しむ子とは		
大坂小学校	岡戸 良太	3 7
学びを深める国語科の授業づくり		
千浜小学校	富井 美帆	3 9
「主体的に学び合う子を育成するための教科等指導の在り方」		
横須賀小学校	阿形 竜馬	4 1
自分もみんなも大切にする子		
大淵小学校	浅場 翔太郎	4 3
考えたくなる国語の授業への挑戦		
栄川中学校	田中 郁美	4 5
学び合い やり抜く 栄中生		
東中学校	大杉 鏡康	4 7
「グラグラの種」ものがたり		
西中学校	横井 泰人	4 9
生徒が主役の授業 ～自ら課題を解決する力の育成～		
桜が丘中学校	川中 瑞貴	5 1
「探究」を通して未来へ一歩踏み出そう		
原野谷中学校	池田 直茂	5 3
原野谷中は対話で創られている！		
北中学校	増田 裕子	5 5
自ら気付き 考えを深め 追究し続ける 北中生		
城東中学校	研修推進委員会	5 7
アウトプット物語！～発信から発進へ～		
大浜中学校	池谷 貴弘	5 9
生徒同士の関わり合いは学び合い		
大須賀中学校	鈴木 健吾	6 1
生徒の「主体性」を引き出すために		

深い学びを引き起こす、

主体的な学び合いのある授業を目指して

日坂小学校 諸星 江里

日坂小学校では、「進んでかかわり 学び合う子の育成 ～深い学びを引き起こす、主体的な学び合いのある授業づくり～」を研修テーマとして、子どもたちの「自分から考えよう、解決しよう、表現しようとする姿」や、「自分と他者の考えを比べ、対話によって深める姿」を目指して日々授業に取り組んでいます。ここでは、総合的な学習の時間・生活科での取組を中心に、友達との対話によって学びを深めていく子どもたちの姿を紹介します。

1年生だって“学びを深める”

まずは1年生の生活科。家でのお手伝いについて振り返る授業で、最初に先生が子どもたちに問いかけます。

T：「お手伝いできた？家族の“にこにこ”は増やせたかな？」

C：「にこにこだった！頑張った！」

家で頑張ったことを自覚する子どもたちは自信満々。しかし、先生がおうちの人からのアンケート結果を発表すると、なんと結果は満足度50%。100%を目指していた子どもたちはがっかりです。

T：「でも頑張ったからこれで終わりにする？」

C：「まだやる！もっと頑張りたい！」

T：「では、今日はみんなで何が足りなかったのか考えよう。」

子どもたちは自分がチャレンジした内容をグループで伝え合い、改善点を探していきます。先生の仕掛けで子どもたちが本気になり、どうすればもっと“にこにこ”が増やせるのかを一生懸命考えました。

学年に合った学び合い

次は3年生の総合的な学習の時間です。3年生は、自分たちが調べた地域の伝説を映画にして伝えようと考えています。3年生は、国語科の授業で「考えを広げてまとめること」を学んだばかり。国語科で学んだことを思い出しながら、付箋を使って早速意見を出し合っています。



- A：「撮影場所を学校じゃなくて中山にしたいな。」
B：「場所の話だね。じゃあCさんと似た意見だから、付箋は近くに貼ろう。」
C：「衣装も必要だよな。」
B：「衣装は小道具の所にまとめて貼っておこうか。小道具についての意見がたくさん出てきたね。」

グループのリーダーが、みんなの意見を聞いてまとめていきます。様々な意見を出し合い、似た意見をまとめることで、自分たちが今後の映画作りでどこに力を入れて考えていくべきなのかを明確にしていきました。

主体的な学び合いとは…

最後に紹介するのは6年生。1年生から積み重ねてきた主体的な学び合いの集大成です。6年生は総合的な学習の時間で、地域の魅力を発信する方法を考えています。あるグループでは、地域外の人を対象にツアーを行い、魅力を発信しようと考えているようです。

- A：「“中山”を中心に情報を発信していくのはどうかな。」
B：「しっかりと理由があるなら中山だけでもいいと思うんだよ。でも、今の理由だと納得できないな。」
A：「でも、“日坂”“中山”“東山”の全部を押し出していくとツアーを実行するのに日数的にも問題があるんじゃない？」



BさんはAさんの説明ではなかなか納得ができません。自分が納得できるまで友達の考えを聞こうとする姿は、流石6年生。相手に説明しているうちに、Aさんの考えも徐々に明確になっていきます。この話題は、全員で話し合っ解決することになりました。全体の場でも様々な意見が出てきます。

- C：「3コースに分かれて、好きなところを選んでもらうっていうのはどう？」
A：「それだと、1個しか知らないってことになっちゃうじゃん…。」
D：「でもそれは、“中山”を選んでも同じことが言えるから…。」

子どもたちは一人一人が課題と向き合い、疑問に思ったことはとことん追究し、納得するまで話し合いました。

より深い学びを目指して

授業後は、教師が授業について学び合う番です。子どもたちの考えが授業でどのように変容したのか、学習問題は子どもたちの思考に沿っていたのか、仕掛けは有効だったのか、話し合いたい内容は山積みです。今後も「深い学びを引き起こす、主体的な学び合いのある授業」を目指して、日々の授業に取り組んでいきます。

教科の見方・考え方を働かせて学び合う

東山口小学校 廣住 悠乃

栄川学園では、学園共通の研究テーマ「進んでかかわり学び合う子の育成」に向け、園・各校で年齢や実態に合わせたサブテーマを設定し、それぞれがサブテーマを達成することで、12年間の一貫した学びの完成を目指しています。

東山口小では、「教科の見方・考え方を働かせて学び合う授業づくり」をサブテーマに設定し、研究を進めてきました。

1年生の生活科の実践を通して、本校の授業の姿を紹介します。

生活科「なつとなかよし」

幼児期との接続の教科である生活科では、具体的な活動・体験（遊び）を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かしながら、資質・能力を育成していきます。見方・考え方を生かしたり、得たことを表現したりすることで、子どもの中にある無自覚であったものが「気付き」へとつながります。このサイクルを繰り返すことで、気付きの質を高め、最終的に「自立し生活を豊かにしていくこと」を目指します。

以下は「なつとなかよし」のしゃぼん玉遊びの場面です。（C児童、T教師）

（ストローでしゃぼん玉遊び後） C「手でもできるよ。」 T「うまくできないんだけど、こつってある？」 C「隙間が空かないように、しっかり閉じるよ。」 T「なんでわかったの？」 C「ストローが丸いから、手でも丸くして、空かないようにやるといいと思ったよ。」	（ハンガーで大きなしゃぼん玉を作りたい2人） C1「ストローで吹くときには、液につけたらすぐ吹かないと落ちてしまったから、今回もすぐ振ってみよう。」 （素早く振るが、すぐに割れる。） C2（スピードを調節すればできるかもしれないと考え、実行。） C1「どうやったらできたの？」 C2「（こつを教える。）」 C1（成功させる。）
--	---

左の児童が話したこつは、無自覚なものでしたが、教師の問い掛けにより言葉で表現したことによって、気付きの質が高まりました。右の児童2は、ゆっくり振る（試す）と、大きいしゃぼん玉を作ることができました（見つける）。児童1は、「自分も力の加減に気を付ければできるかもしれない（見通す）。→試したらできた。」のように、友達と進んで関わったことで、学びを深めました。

このように、子どもが見方・考え方を自然と働かせる（生かす）ためには、教師が発問を工夫したり、資料を精選したり、場の設定をしたりすることなどが大事だと、共通理解することができました。どのクラスも、見方・考え方を意識しながら、子どもたちと一緒に授業を作っています。

東山口地区って、いいね！

東山口地区の良さを感じられるような体験ができるよう、地域コーディネーターや東山口地区の方々に協力をお願いしました。

5月は、地域の方の畑で梅採り体験をしました。木になっている梅の実を初めて見る子どもも多く、たくさんの発見がありました。採った梅を使い、一人一瓶梅シロップ作りをしました。子どもたちはその瓶を家庭に持ち帰り、家族と一緒に味わったことを嬉しそうに話してくれました。



11月には、地域の方に用意していただいた業務用の焼き芋機を使って、石焼き芋体験を行いました。自分たちが育てたさつま芋が焼けていく様子を間近で見て感動しました。最後にみんなで食べ、野菜を育てることの楽しさを実感しました。

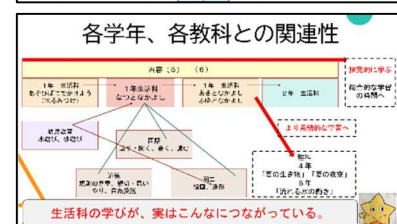


振り返りでは、「〇〇さんは、自分たちが行く前に畑をきれいにしてくれて、採りやすかった。嬉しかった。」「自分たちは見に行ったり教室へ戻ったりしているのに、〇〇さんは寒い中ずっと焼き芋を焼いていてくれた。」「地域には、すごい人がたくさんいる。」「地域の人がいるから、自分たちは楽しいことができる。」など、地域の方々の支援によって自分たちが楽しく学んでいることに気付きました。「東山口地区の良さ、大発見！」でした。

夏休み中は・・・先生達も勉強です！

本校は、窓口教科を設定せず、自分で教科を決め、研修に励んでいます。8月の夏季研修では、各自がこれまでの成果と課題をまとめ、中間発表会を行いました。互いにそれぞれの成果を共有することで、自身の指導に生かしたいことが見つかったり、異なる教科でも似ている部分があることを発見したりしました。

東山口小の職員は、研修に意欲的に取り組みます。これからも自分の得意なことを生かし、みんなで研修を重ね、子どもとともに「かがやく授業づくり」を目指していきます。



作ろう！縄跳びの連続技

西山口小学校 渡辺 智美

「やってみたい！」「楽しそう！」何事にも好奇心いっぱいの2年生。体育の時間になると体を動かしたくてうずうずするくらい、やる気満々の子どもたち。しかし、短縄跳びに関しては、今までの経験から「できない。」と苦手意識をもつ子どももいました。そこで、体づくりの運動遊び「なわとびの達人になるぞ！」という単元を通して、「縄跳びって跳ぶだけじゃないんだね。」「こんな技もあるのか。」といった驚きや「何？その技、おもしろい。」「跳ぶのは苦手だけれど、これならできるかも。」という期待をもたせたいと考え、実践に取り組みました。また、短縄を使った運動だけでなく、本校の研修テーマである「話して 聞いて つなげよう」の姿を具現化できるような場を設定することにしました。

どんな技があるのかな？

子どもたちにとって身近な技と言えば、「前回し跳び」「後ろ回し跳び」「前回し片足跳び」です。「えー、苦手だなあ。やりたくないなあ。」という子どもたちの気持ちを打破するために、止め技4種類、回し技4種類を伝授しました。

「片足止めって簡単そう！！」「腕に巻き付けるなんておもしろいね。」「体の上とか横とかいろいろなところで縄を回せばいいんだ。」新たな技を伝授された子どもたちは早く自分でやりたくて仕方ありません。跳び技が苦手な子どもも目をきらきらさせ始め、技の練習に取りかかりました。

連続技ってどういうこと？

「跳び技」「止め技」「回し技」の練習を終えた子どもたちに先生から「連続技をつくってみよう。」というミッションが与えられました。「えっ？連続？」「どう



やってやるの？」「どんなふうにするの？」子どもたちは、もう既に興味津々です。そんな子どもたちの主体性をさらに高め、自分事として活動させるために、「2年部の担任3人で行う連続技発表会」の動画上映が始まります。「あっ！！先生3人でやったの？」「回数揃えて跳んでいたよ。」

「途中で技が変わるんだね。」「せーのって掛け声も聞こえたよ。」「すごいね。楽しそう。」などと思わず声が出ます。先生方の動画から「こんなふうにやればいいんだ。」「こんな楽しそうなことをやるんだ。」と授業の見通しがもてました。

早速グループに分かれて、散らばります。与えられた道具は、ホワイトボードと技カードです。互いのできる技を見せ合うグループ、座り込んで話し合いから進めるグループと様々ですが、子どもたちの思いはひとつ！「楽しい連続技を作りたい！」これこそが今日の授業のねらいです。「回し技はどれにする？」「私は、前回しならできるよ。後ろ跳びは苦手だからごめんね。」「じゃあ、前回しやってみようか。」「いっせーのでってみんなで言おうよ。」うまくいっても、失敗しても、子どもたちが自分たちで声を掛け合っています。試行錯誤しながらよりよい連続技の組み合わせを見い出そうとする姿が素敵でした。



「もっとよくしたいな・・・。」

この縄跳びの学習を通して、グループでの話し合いから自分たちで決める良さや楽しさを実感した子どもたち。それぞれのグループの発表から工夫を見つけたり、自分たちとの違いを見つけたりすることもできました。12月の公開日「せんだんの日」に向け、国語「お手紙」の教材を用いてグループごとに音読劇をすることになりました。どんなふうに工夫すればよりよい劇になるのか、アイデアを出し合います。自分の考えをもち、伝える。友達の考えを聞き、自分の考えと比べる。友達の意見も受け入れたり、自分の気持ちに折り合いをつけたりしながら少しずつ工夫を重ねます。体育での話し合いで学んだ成果が音読劇にも生きていました。その姿こそ、我が校の重点目標「笑顔でやりぬこう 笑顔でつながろう」の目指すべき姿です。



自ら・みんなと繋がって学ぶ楽しさをひろげたタブレット活用

上内田小学校 石田 智子

一人一台端末が導入された昨年度は、教師も子どもも「まずは使ってみよう！」を合言葉に実践を積み重ねました。今年度は、だれもが主体的・積極的に取り組み、進んで友達と関わり合える子の姿を期待し、「ICTの効果的な活用」を研修の柱の1つとして授業づくりを進めてきました。

「知りたい!」「解決したい!」が生まれる (ICTの効果的な活用①)

「わあ、チョコレート美味しそう！」大型画面に映し出された写真に子どもたちの視線は釘付け。これは、2年生算数「かけ算～九九のきまりを見つけていかそう!～」の授業です。

子どもたちから、「あっ、食べてあるよ。」「6個だね。」「残りのチョコレートは何個かなあ。」と、つぶやきが聞こえます。

そこで、「先生が数えてみるよ。1, 2, 3…」と1つずつ数え始めると、「先生、遅い!」「それじゃあ、どこ数えたか忘れちゃう。」と声が上がります。「では、これはどう? 2, 4, 6, 7…」と教師が数えると、

「だめだめ、先生、違うよ。」「2, 4, 6, 8, 10だよ。」とみんなでアドバイス。

そのうち子どもから「九九は?」「2個ずつだと15あるよ。」「 2×15 は九九にないからできないよ。」「簡単ではないな。」「3個ずつだと 3×10 …。できないか。」「4ならどう?」と対話と思考が始まりました。そして、「何とかして九九を使って求められないかな。」という本時の学習問題が子どもから生まれたのです。

子どもたちは、「早く工夫した解き方を見つけない!」とやる気満々です。



「こうすればいいよね。」「まだある!」が生まれる (ICTの効果的な活用②)

「では、タブレットを開きましょう。」の教師の指示を聞くと、手慣れた様子でタブレットを操作していきます。

「先生、カードが届いています。」「僕、いい方法がある。」

「あの方法でもできそうだ。」と、あちらこちらから聞こえてきました。

教師の「たくさんの方法を見つけてください。」の呼び

かけで、子どもたちはタブレット上で自分の考えを作り始めました。届いたカードの図に線を書き込んだり、式や言葉を付け加えたりしながら考える子どもたち。解き方のカードが一つできるとまた別の方法を探し、1人で2つ3つと考えを作った子もい



ました。なかなか思いつかない子も、教師が用意したヒントカードを手にして「これを真似してみよう。」とチャレンジしていきます。一人一台端末をノートのように使うことで、どの子も自分のペースで学習問題を解決しようと取り組む姿が見られました。そして、自分の考えをタブレット上の広場に提出すると、一瞬で友達と考えを共有することができるのです。

「これってどういうこと?」「なるほど!」が生まれる (ICTの効果的な活用③)

「友達は、どんな方法でやったか、自分と同じ所、違う所を見つけてください。」と指示を出すと、子どもたちの交流が始まりました。本校では、学年の発達段階を踏まえた「伝え方・聴き方名人表」を作成し、本時の目標に迫るための話し合いの視点を与えています。広場に出された友達の考えを見た子どもたちは、「〇〇さんに聴いてみよう。これってどういうこと?」と、タブレットを手に、積極的に友達に聴いていきます。1つの画面を数人で覗き込みながら対話をする中で、疑問が解けていっているようでした。うまく説明できない友達には、「〇〇さんの考えは、こういうことでいい?」と、自分なりの理解を伝えて確かめる様子も見られました。



そして、1時間の終わりには、九九を使った工夫した解き方に「移動作戦」「かけたす作戦」等の名前が付けられ、いくつかのまとまりにすると九九が活用できることが分かりました。



子ども自ら選択して学び続ける ICTの効果的な活用を目指して

3年生理科で、「音が出る時に物はふるえているのか」という子どもから出た疑問を調べる学習をした時のことです。グループで実験中、共振太鼓を叩く様子をスロー動画で撮った子がいました。それを見て、叩く強さによって中のボールの跳ね方が変化することを発見したグループの子どもたちは、その後全体に発信してクラス全員の学びを深めたのです。子どもたちの柔軟な思考と「やってみよう!」という意欲を高めるツールとして、タブレットの有効性を感じた1コマでした。

この2年間で、教師も子どももICTの操作にすっかり慣れ、多くの考えを共有したり、主体的な交流に繋がったりする“効果的な活用”が増えてきました。この成果を踏まえ、来年度は、タブレットを含めた様々なツールの中から、子ども自身で必要なものを選択して主体的に学習に取り組む場を増やしていきたいと思えます。“自ら学ぶみんなと学ぶ”本校の子どもたちが一層輝く姿を期待し、職員の研鑽は続きます。

学びが深まる授業をめざして

城北小学校 鈴木 陽子

深い学びとは？～Team 城北で～

「授業でめざす子どもの姿はどんな姿か。」「1時間で、どんな力を身につけさせたいか。」日々の授業の中で、教師が悩みながら考え、大事にしていることです。深く学ぶ1時間を積み重ねていくことで、子どもたちに確かな力をつけたいと願っています。

本校では、教師がTeamになって、次のような子どもの姿を深い学びと考え、研修を進めています。

「学んだことを関連付けている姿」「自分の思いや考えと根拠を結びつけている姿」「複数の考えから、より適切なものを判断している姿」「これまでに身につけたことを使って、新たなものを創造しようとする姿」

そのために、全職員で効果的なiPadの活用を進めることや、一人一人の子どもの考えを丁寧に見取することに力を入れて取り組んでいます。

より効率的に～iPadの活用を進める中で～

本校では昨年度から“i-team”が中心となって教師が積極的にiPadを使用し、使い方に慣れてきました。子どもたちも、意欲的に取り組み、授業で日常的に活用するようになってきました。

しかし、活用が進む中で「これは、アプリを使うより、ノートに書かせた方がいいのではないか。」や「写真で示すより、動画で見せた方が考えを共有しやすいのではないか。」と悩みました。

そこでiPadをただ使うのではなく、どんな目的で、どんな方法で使うことがいいのか、実際の授業を通して、検証し合いました。



算数で図形を操作して考える問題は、ワークシートより、アプリで学習する方が短い時間で子どもの理解が深まりました。

〈実践より〉3年生国語「ちいちゃんのかげおくり」



『きらきらわらいました』と書いてあるから、ちいちゃんは家族に会えてうれしかったと思うよ。」教師の“問い”について、一生懸命考える子どもたち。

iPadのアプリや本文が記載されたワークシートが子どもの思考の手助けとなり、自分の思いや根拠を結びつけている姿が見られました。

個を徹底的に分析！子どもは、どうやって考えているの？

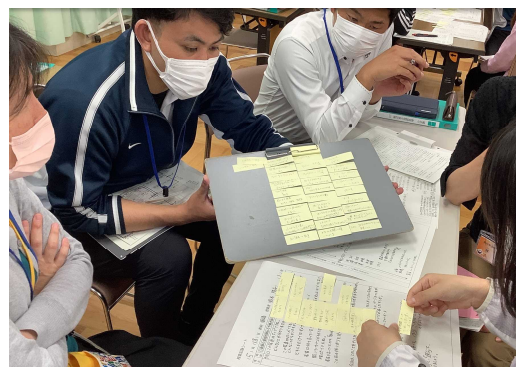


1時間の授業で、教師のどんな“問い”で子どもが深く学ぶことへとつながったか、検証するために“学習過程可視化法”を用いて研修しています。

一人の子どものつぶやきや行動を細かくメモして、子どもの思考の流れを記録に残しました。

子どもが自分ごととして考える“問い”には、どんな言葉が良かったか、細かいメモをもとに教師らで分析しています。「～しよう。」でなく、「～はどちらだろうか？」や「なぜ～だろうか？」となれば“問い”がより自分ごととなります。

また、個を徹底的に分析することで、教師はどんな手立てをすればよいのかが明確になってきました。そんな“問い”を追究する子どもたちは、複数の考えから、より適切なものを判断することができます。



学びを広げて～未来を創る子へ～



〈実践より〉4年生算数「複雑な形の面積を求めよう」

教師は事前にアプリを使って、課題を送信しました。授業の前に「昨日家で、こうやって考えたけど、〇〇さんはどうやって答えを出した？」という子どもたち同士の対話から授業がスタートしました。

図に分かりやすい書き込みをして伝える子や、前の単元で学んだ「式と計算」の数式をもとに伝える子……

教師は「どっちが速い？」「どっちが分かりやすい？」と切り返します。

授業の後半では、子どもたちのつぶやきを教師が板書しながら、一緒にまとめていきます。「じゃあ、こんな形だったらどのやり方がいいのかな？」「アプリやワークシートで別の問題もやってみたい。」と、新たな物を創造しようとする姿が見られた場面です。

今後も、子どもたちの姿に常に立ち返り、全職員がTeam城北となって、さらに研修を深めることで、子どもの学びを広げたいです。

そして、本校の学校目標である「希望に向かい未来を創る子」を授業の中で育てていきます。



1人1台端末の効果的な活用をめざして

第一小学校 山崎 崇斗

iPad が 来 て 2 年 目 !

「去年の授業でたくさん使ったから色々なアプリを知っているよ。」「スライドのアプリで自分の考えをまとめた方が文章で書くより得意だな。」「写真をマークアップして分かりやすくするね。」

昨年4月から、市内の全ての小中学校にiPadが導入されて1年が経過しました。子どもたちは文房具の1つとしてiPadを使用し学びを深めるツールとして活用しています。

教師も「とにかく使ってみる」を合い言葉にして1年間研修を深めてきました。様々な成果、課題が出ましたが、「とにかくiPadを使う」ことを全職員が体現できました。以下に今年度の研究の歩みをまとめていきます。



意 図 的 に iPad を 使 っ て み よ う !

令和3年度には「〇〇さんが友達の顔写真をマークアップで落書きしているよ。」「3年生の方が4年生より iPad のスキルが進んでいるな。」などの反省が子どもや教師から挙がりました。令和3年度は、とにかく使ってみることを大切にされたため、情報モラルが未熟になったり、学年毎どのように指導を続けていけばいいのか分からなかったりしました。この反省を基に令和4年度は意図的にiPadを使用し、授業の単元を通して効果的に活用できる場面を探ることを意識しました。

「このアプリの方が発表しやすいと思うな。」「私の考えがiPadで上手に伝えられるようになってきたな。」など、子どもたちから主体的に学習に向かう姿勢が見られてきました。

iPad (ICT) を 「使う」から「使いこなす」へ

サッカーの試合速報を知りたいとき、皆さんはどのように調べていますか。また、美味しい食事屋を調べるときにはどのように調べていますか。

私たちは、無意識のうちに調べたいものを最善の方法で調べる方法を模索し、一人一人調べ方が異なると思います。

本校では、学習の中で子どもたちが情報活用能力を育成できるよう、掛東学園情報活用能力育成系統表や、第一小学校6年間でめざす子どもの姿を作成し、職員で共有しました。教師側もただ iPad を使わせるのではなく、「この学習をより分かりやすくするために、どのようなアプリを使用すればいいかな。」と子どもたちに問い返すことを意識しました。

次第に子どもたちも学習の中で、「友達と考えを交流するには〇〇のアプリを使用した方がいいな」とつぶやき出します。iPad を有効に活用する姿が見られるようになってきました。

情報活用能力を身に付けるために アナログとデジタルの意図的な活用を

「私は字を鉛筆で書いた方がいいな。」「私は iPad で文章を作った方が早くできるから好きだな。」

子どもたちはそれぞれの思いをもって学習に向かっています。全ての学習活動において iPad が力を発揮できるとは限りません。教師が意図的にアナログとデジタルの使い分けをすることで子どもたちも自身で考え行動することができるようになります。また、小学生段階では鉛筆で字を書くことは今後も大切にしていかなければなりません。今後も、教師が学習活動の中で意図をもって ICT を活用することを本校の研修の軸としていきたいと思います。そして、めざす子どもの姿「なぜ? どうして? を大切にできる子」へ近づいていけるよう、本当の意味で ICT を使いこなせるようにしていきたいです。

第一小学校6年間でめざす児童の姿 ～6年間で情報活用能力を高めていくために～

「なぜ? どうして?」を大切にできる子」

段階的な指導

低学年スキル期 中学年 スキル探求期 高学年 スキル決定期
(与えられた活用法を知る) (使用する目的やアプリのよさを理解する) (目的に向かって選択する「子どもが自己決定」)

目指す児童の姿に近づいていくために

- ・児童が選択できるように、教師が児童に様々な経験の場を設ける。
- ・高学年期には情報スキルを選択した根拠が語れるように、教師が用いる目的を児童に問い返すようにしていく。

本校の児童の特色

基礎学力が高く、明るく真面目に落ち着いた児童が多い。一方で、自ら問いをもって授業に参加する児童が少なく、教師の指示を待つ姿が多い。



「話す力」「聴く力」の向上を目指して

「今どこにでも行けるとしたらどこに行ってみたいですか。」「イタリアです。」「それはなぜですか。」これは、毎週水曜日の朝活動の時間に全校で行われている「対話トレーニング」の一場面です。子どもたちは3人組になり、毎週変わるテーマに沿って、自分の考えを伝えたり相手の考えを引き出す質問をしたりして「話す力」や「聴く力」を高めています。



本校では、「めあてに向かって高めよう自分を みんなで」という重点目標を達成するために、昨年度同様「根拠をもって判断し表現する力を育成する授業づくり」という研修主題を設定し、10の教科領域に分かれて研修を積み上げてきました。教師が資料を精選して示したり既習事項を掲示したりするなど根拠を見出す材料を工夫することで、多くの子どもたちは根拠をもとにした自分の考えを表現することができるようになってきました。一方で、他者との対話で学びを深める場面では、自分の考えを伝えるだけで終わってしまい、練り合うことに課題が残りました。

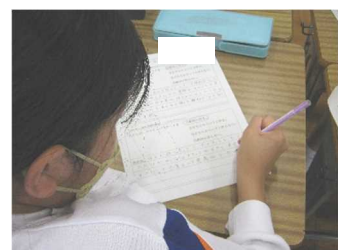
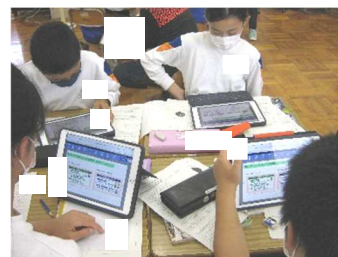
複数の資料から共通点を見つけよう！

「米づくりがさかんな地域は、どのような特色があるのだろうか。」「米の生産量が多いのは新潟県や北海道だったから寒いところじゃない。」「たくさんお米を収穫するから広い田んぼがあるところじゃない。」既習事項をもとに子どもたちは次々と予想を立てていきました。そして、米作りが盛んな地域の航空写真や雨温図などの根拠となる資料が配られました。ここで教師が指示を出します。「今日は、新潟県南魚沼市と山形県庄内平野の2か所の資料を配付します。まずペアで資料を読み取って、自分が調べた地域の特色を話し合ひましょう。そして、読み取った特色を相手ペアに伝え、共通点を見つけましょう。」一つの資料だけを読み取って特色と捉えるのではなく、二つの資料から互いの意見を聞き共通点を話し合うことで自分たちだけでは気付かなかった視点を得るなど、より質の高い話し合いができました。



切り返しの資料 → あなたならどうする？

「これは何でしょう？」「あ、マイナンバーカードだ。」「僕も持ってるよ。」
今、政府が普及促進を進めているマイナンバーカードについて、自分の意思を決定する授業が行われました。子どもたちは「テレビのコマーシャルなどでなんとなく聞いたことがあるけれど、内容がよく分からない…。よし、調べてみよう。」と、iPadを使って情報を集め始めました。調べていくと便利な点がたくさんあることが分かりました。「じゃあ今（10月末時点）、日本全体の何%くらいの人がマイナンバーカードを持っていると思う？」「80%くらいかな。」「実は51%ほどの人しか持っていません。」「ええ、便利なのに何で？」予想外の数字に子どもたちの好奇心は刺激されました。そして、「マイナンバーカードは作るべきかどうかを考えよう。」という学習課題を設定し、最初の自分の考えをプリントに書きました。その後、事前に保護者や職員に行ったマイナンバーカードに関するアンケート結果を配付して、なぜマイナンバーカードを作ったのか（作らないのか）という理由などを知り、改めてマイナンバーカードを作るべきかどうかを班で話し合いました。班の意見がまとまり、さあ全体で発表しようとしたその時、教師から新しい資料が配られます。それは、「カードを作った時のデメリットと、カードを作らなかった時のメリット」が書かれた「切り返しの資料」です。これにより子どもたちの思考は揺さぶられ、どちらがよりよいのか根拠をもとにもう一度話し合う姿が見られました。メリット・デメリット両方の側面を理解した上で最終的な自分の結論を決め、プリントに理由を付けてまとめました。子どもたちが考えてみたいと思う学習課題の設定や、切り返し資料による思考の揺さぶりは効果的でした。



更なる深い学びを目指して

この他にも、本校では根拠をもとにした自分の考えを、対話を通して深めていけるように様々な授業実践を行ってきました。授業実施後は共通の振り返りシートに成果と課題、解決策を記入し、互いに報告し合うことで授業づくりの視野を広め、授業改善を図ってきました。また、iPadを授業の中で活用する場面が増えてきました。「ミライシード」というアプリを使い、自分の意見を付箋に書き込んだり友達の考えを画面で共有したりして自分の考えと比べて考えました。さらに、自分が気になる事柄を調べたり友達の動きを撮影して見本となる動きと比べてたりしました。来年度は、他者との対話で学びを深める場面をより充実させるための手立てや、練り合う場面でのICTの効果的な活用の仕方について、研修を積んでいきます。

学びを深める子の育成 ～2年間の算数の実践を通して～

中央小学校 岡本 慎也

中央小学校では、高学年教科担任制、午前5時間制、ICTの効果的な活用、授業とつながる家庭学習等、授業に関する数多くの改革を進めてきました。学校教育目標「なりたい自分に向かって挑戦できる子」を受け、今年度も研修テーマを「学びを深める子の育成～子ども中心の授業づくりを通して～」として授業づくりをしてきました。様々な改革は、子どもたちの授業に対する考えを「先生が教えてくれるもの」から「自分たちで考えるもの」へと大きく変えることにつながりました。

2年間の積み上げによって変容してきた子どもたちの姿

私は、昨年度5年生算数の授業を担当し、今年度も6年生の担任として引き続き算数の授業を担当しました。2年間の継続した取組により、子どもたちの授業に向き合う姿は大きく変容してきました。学校の授業でも家庭学習でも、自己の学びを調整しながら単元を通して粘り強く思考し続ける子どもたち。自信をもって自分たちの授業をつくることができている姿です。

子ども中心の学びを実現するための単元デザイン

新しい単元に入るとき、「単元を貫く課題」について考えることからスタートします。教科ごとに各単元で身に付けるべき事項があり、単元を通してどんな子どもに育てたいかを考えて単元をデザインします。「単元を貫く課題」は、その学びの中心となるものです。どんな課題だったなら子どもたちが興味をもち、子どもたちが主体的に学習していけそうかを考えて課題を設定します。「並び方と組み合わせ方」の単元では、子どもたちが楽しみにしている修学旅行を題材にしました。『6つの目的地から4つ選ぶ並び方は全部で何通りあるか、さらに、その目的地を回る順番が全部で何通りあるか、正確に求めるにはどうしたらよいだろうか。』という課題をつくりました。「拡大図と縮図」の単元では、『中央小の校舎の高さを求めるにはどうしたらよいだろうか。』という課題を設定しました。

「比とその利用」の単元では、先生方の日常生活の場面を題材にし、『A先生とB先生が炭酸飲料とお茶をどれだけ飲めるか求めるにはどうしたらよいのだろうか。』という課題を提示しました。

5年生の最初の頃は、難易度の高い課題に抵抗感をもった子もいましたが、今で



は、「この考え方を使えばいけるんじゃないかな。」「これから学習する中で、～の解き方が分かればできそうだよ。」といった前向きな思考に変わりました。それは、子どもたちが授業を通して新たな学び方を身に付けたからです。初めて課題に出会ったときには、自分の答えをつくれないうもたくさんいます。でも、それを解決するために単元を通して知識を身に付けたり、思考を繰り返したりして深め、単元の最後にゴールをするということ、自分だけでは難しいことも、考えをもち友達と対話をする中で考えが広がったり理解が深まったりしていくことを子どもたち自身が理解しています。それが子どもたちの学びに対する自信につながっています。

単元を通して、自己の学びを調整しながら学ぶ子どもたち

中央小では、授業と家庭学習、家庭学習と授業をリンクさせながら、学習を進めるとともに、学校の授業は思考する場であることを強く意識して単元をデザインしています。ある日の学校の授業では、課題に対して友達と十分に対話をして自分の考えを深めます。家庭学習では、その日の授業の課題について振り返り、自分の考えを再考したり、自分自身の理解度を確かめたりします。家庭学習を通して、自分の頭の中がすっきりすることもあれば、反対に、分からない部分に悩むこともあります。でもそれでよいのです。次の日の授業では、その疑問を解決するためにまた友達と対話を繰り返します。それが自分の学びをさらに深めることにつながります。自分の力で得た答えは、理解を確実なものにし、次の学びへの意欲にもなります。

6年生児童の単元を貫く課題についての振り返り

算数は苦手だけど、授業が好き

この2年間、子ども中心の授業づくりを目指して取り組んできました。中央小の6年生93人にとったアンケートでは、96%の子どもたちが、算数の授業が「好き」「どちらかと言えば好き」と答えました。

「授業で、違う意見の人や他の班の人たちと意見と交流し合うことで、

考えがより深まる。気付かなかったことなども発見できる。」

「分からない問題を、友達と考え合ったり聞いて深めたりなど、

自分たちの力で納得するまで考えることができる。」

学習は苦手でも、友達と一緒に学ぶことは楽しいと考える子がたくさんいます。子ども中心の授業づくりを通して、授業は「先生が教えてくれるもの」から「自分たちで考えるもの」へと考え方をさらに前進させることができました。中央小は、未来につながる学びを深める、そんな子どもたちを育てていくことを続けます。

曾我をプロデュース・・・どんなことを？誰に？何のために？

曾我小学校 永田 和輝

どうしたら、調べたい！ 伝えたい！ となる？

時代は変わりました。今、子どもたちには、言われたことをただやるだけでなく、「自分で目の前の問題を見つけ、それを解決するためにはどうすればいいかを考えたり、調べたり、聞いたりして、それを他の人にも分かるようにプレゼンテーションする」といった力が求められています。

総合的な学習の時間の授業のねらいは、まさに「子どもたちが自ら課題を見つけ、問題解決のために主体的に考え行動しようとする態度を育てる」ことです。私は、子どもたちに、自分たちが生まれ育った曾我地区の魅力を調べ、伝えてほしいという願いから、「曾我プロデュースプロジェクト」と銘打って、授業を計画しました。子どもたちが「もっと曾我のことを調べたい！」「学んだことを分かりやすく伝えたい！」という思いになるためには、どうしたらいいか・・・。そんなとき、夏休みの研修の中で、探究的な学習の過程において、子どもを揺さぶる「ショック」を与えることが、最も大切であることを学んだのです。

子どもを揺さぶる4つの「ショック」！？

子どもたちが「え！なんで！」「どういうこと？」「もっと知りたい！」と、心が動かされるような「ショック」として、次の4つを展開しました。

- ①市域西端の曾我と東端の日坂との交流
- ②曾我地区まちづくり協議会会長さんに曾我地区について聞く
- ③キッチンおはなで曾我の魅力を調査
- ④校長による曾我についての話

日坂小の6年生とオンラインで繋がり、曾我のことをどのくらい知っているか、また、日坂はどんな地区か、伝え合いました。お互いにほとんど知らないということが分かりました。「曾我のことをもっと知ってもらいたい」「そもそも、自分たちの地域のことをよく知らない」と、ある程度のショックを受けていました。

まちづくり協議会会長の廣岡さんからは、地区の名前の由来や東海道の歴史、



安全・安心なまちづくりについての話を伺うことができました。子どもから「公園などの遊び場を増やしたい」という希望を伝えると、その思いをしっかりと受け止め、掛川市に提案してくださることになりました。

子どもから、曾我の魅力の1つに、キッチンおはながあると出たので、見学をさせていただきました。人気の商品や、店長さんの思いについて調べることができました。

「校長先生なら曾我のことを知っているそう」という意見から、校長が、曾我小の歴史や、魅力について話をしました。曾我地区が交通の要所になっていることや、自身と曾我との関わりの話、そして、曾我小の魅力はあなたたち子どもなのだという話を聞くことができました。



子どもの意識はどこへ向かっていたか

「体育館を立てるときに弥生時代の遺跡が見つかったなんて知らなかった！」「普段登下校している松並木を戦国大名が通ったかも！」4つの「ショック」を経て、子どもたちは曾我の歴史や魅力に興味をもった様子でした。ただ、「どうしてなんだろう？もっと調べたい！」という気持ちにまでは至らなかったと感じました。学んだことを誰に伝えたいのか、相手意識をもって学習を進めていけるようにしていきます。

子どもたちが主体的に学んでいくために

今回の実践を通して、子どもを揺さぶる「ショック」とは、ただ「調べてみたい」という興味を引き出すだけでなく、「何のために調べるのか」「調べたことをどう生かすのか」「調べて分かったことを誰に伝えたいのか」ということを、教師の中ではっきりさせておくことが大切だと明らかになりました。

総合的な学習の時間では、「子どもたちにどのような課題意識を持たせるのか」ということが、主体的な学習をつくっていく上で肝要です。これからの時代を生きていく子どもたちにとって必要になる力を育成するために、効果的なショックを与え、子どもが自ら学んでいく授業づくりを進めていきます。

子どもが主役！自ら学ぶ授業をめざして

桜木小学校 石津 まりこ

令和のお手伝い大作戦

「これは、まずいな。」

1年担任のA先生は、これから始まる生活科「ひろがれ えがお」計画に取り掛かるなり、つぶやいた。

昭和、平成と違い、各家庭では食洗機や洗濯乾燥機などハイテク家電が増え、お手伝いの内容が様変わりしている。桜木地区は、とりわけ新しく家を立つ住宅地と昔から住み続ける地区があって、子どもの住む家の環境、設備とも様々だ。

「これまでのように、学校で洗濯物のたたみ方を教え家でやってくる学習は、今の時代に合っていないんじゃないか。」

A先生がそう考えるようになったのには、実は、わけがある。家族の「手」が行う仕事を見つける授業で、ひとつのハプニングがあった。

「やり方が違うよ。お風呂掃除のとき、うちはこすらなくていいんだよ。」

常日頃から一人一人に最適な学びを大切に考えるA先生は、家庭環境の全く対照的な子どもの話を聞いたとき、心に深くうなずかされるものがあった。

「そうだ、タブレットでお手伝いの写真を撮って我が家のお手伝いを紹介したらどうだろう。」

子どものやる気が続くよう、ポイント制に加え、ワークシートに保護者のコメントを書いてもらうよう、家庭にお願いした。

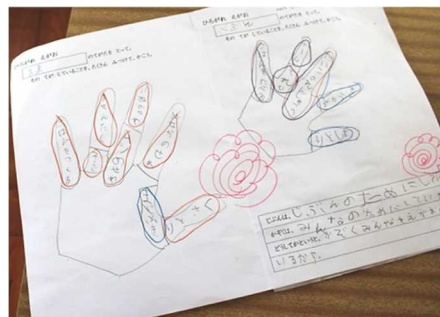
家族の笑顔が自信に

「お母さんも、家族も、自分も、みんな笑顔になったよ。ぼくにも、人を笑顔にできる力があるんだ。こういう笑顔を世界中に広めたいな。」

そう話す子どもたちは、タブレットとワークシートを大事そうに抱えて、満面の笑みだ。お手伝いを写した写真を指差しがなら、思い思いに語る。聞いている友達も、相手の榮譽を心から褒め称えた。

「お手伝いを、毎日続けているんですよ。もう習慣になっているようで。」

保護者からこんな言葉が出てくると、先生は嬉しい。だが、たいていは子育ての苦労話に花が咲く。「まだまだ令和育ちの1年生の目線へ降りて行き方が足りないのかな。」と柔和で明るいA先生は、子どもの笑顔を思い出しながら考え続ける。



知識はきっちりまとめたい！でも、我慢

社会科を得意とする6年担任のB先生は、「大仏づくり」の授業案検討をしている。歴史分野は、先生が知識を一方向的に教えこむことが多くなるのだが、どうも手応えがなかった。

「子どもに任せて先生の出番を極力減らすには、どうすればよいのだろうか。」

6年生は、タブレットに送られた資料をもとに授業内容を予習し、話し合いから授業を始めることにしている。タブレットを上手に使いこなせるからこそできるやり方だが、授業の時間をたっぷり話し合いに使えるのはありがたい。

「一人一人が考えを発信する役割をもち、他の班とメンバーをシャッフルして対話を続けるワールドカフェ方式なら、自信をもって伝えることができるはず。」

しかし、授業のほとんどを子どもに任せるとなると、最後は、足りない部分を教師が補わなくてはいけないのだから、毎回1時間では終わらない。それでも、B先生は姿勢を崩さなかった。

最大の壁は、授業のまとめ

「私たち教師は、全員に同じ理解をさせなくてははいけないと追い立てていたんじゃないか。」

先生がキーワードだけ押さえてまとめをしなくなったことに、子どもたちは戸惑った。つい、口を挟みたくなることもあったが、我慢して黙っていた。

そう思って待ち続けると、ある子どもの声が耳に飛び込んできた。

「自分たちの力で納得する答えに近づいていくと、まるでその時代にタイムスリップしたかのような気持ちでキーワードが整理できる。考えるのって、こんなに楽しかったんだ。」思わず、相手を崩した。

「うれしかったです。こっちが説明したいもどかしさが、いっぺんに吹き飛ばすような気がして。」

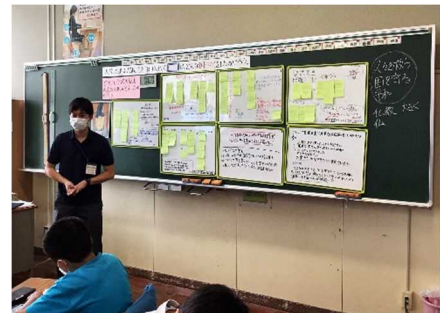
相手の考えを深く理解しようと思うと、雑学も余談も交えながら対話する。それが子どものペースなのだ。

次の日の授業では、子どもから質問に来た。いい質問だった。自分の頭の中で分かり始めているな、と喜んで答えた。

「そのうち、授業の段取りまで自分たちで考えられるようになりました。」

奈良時代の終わり、ついに6年生は子どもだけで授業を成立させることを達成した。教師が黙ったおかげで、自分たちの力で、受け身から抜け出したのである。

社会科の授業を終えた時、B先生は、子どもたちの学ぶ姿勢が、4月当初とは全く変わったと思った。見事に、自ら学ぶ子どもを育てたのだ。



一歩ふみだす和田岡っ子

和田岡小学校 小長井 奎佑

和田岡小学校の目指す学び

今年度、授業の子ども達の様子で大きく変わったことと言えば、「だってね」や「どうしてかと言うと」というような根拠や理由を言う姿がたくさん見られるようになったことです。それは、子ども達が自分の意見にこだわりをもち、相手に分かりやすく伝えることを強く意識できるようになったからです。和田岡小学校では、1年間、発表や聞くこと、反応についてのクラス目標を考え、目標達成に向けて取り組んできました。ここでは、クラスの目指す授業像に向けて、一歩ふみだしてきた和田岡っ子の姿を紹介したいと思います。

みんなで取り組んだ 授業像

年度初め、「誰かに何かを言われたら…。」「間違えていたらどうしよう。」というような不安で、一人ではなかなか一歩ふみだせない姿が見られました。一人では不安なこともみんなで取り組めば自信をもって取り組めると考え、クラスの目指す授業の姿をつくり、自分の意見に自信をもって授業に参加できるよう、児童と教師が一丸となって取り組みました。日に日に、授業で発表したり、相手の意見に反応したりすることが増え、子ども達の話合いで授業が進行するようになってきました。



〈各クラスがつくった授業目標〉

1年→『たのしい がんばる おもしろい じゅぎょう』

2年→『みんなで わかる たのしい じゅぎょう』

3年→『人の発表をよく聞いて反応する』

4年→『考えながら聞く 発表を聞いて反応する』

5年→『発表相手を見て反応する』

6年→『みんなでしゃべって、つないで創る授業』

青空→『しせいよく はっきり音読 さいごまで やりきる』

どの学年も話す、聞く、反応することを目指した授業像をつくりました。子ども達は日に日に、どのように話せば周りが自分の意見に納得してくれるか、どのように聞けば友達の意見に対して反応することができるようになるか考え始めました。

理由や根拠を見つけよう

同じ考えでも、その考えを導き出す過程は人それぞれです。授業では、理由や根拠がそれに当たります。理由や根拠を明確にして対話することが授業像達成に繋がると考えました。

【授業例①】

6年生国語「時計の時間と心の時間」の単元では、筆者が挙げた事例に対して、『共感』か『疑問』かの2つの立場で自分の考えをもちました。ある子は「事例に、朝と夜は時間が経つのが早く感じるからと書いてあるから…」と、本文を根拠にして自分の立場を説明しました。また、「朝は眠くて時間が経つのが遅く感じる」というような自分の経験を根拠としたことで、説得力が増した発言をする姿も見られました。



【授業例②】

1年生国語「じどうしゃくらべ」の単元では、本文を仕事とつくりに分ける学習をしました。ただ、本文の最後に「色は黄色です。」という仕事ともつくりとも言えない一文を付け加えることで、子ども達に「これはどっちなんだろう。」という問いをもたせました。それに対して「色が黄色じゃなくても、クレーン車は仕事ができる。」という仕事とつくりの関係を根拠に説明したり、「黄色じゃないクレーン車を見たことがある。」という体験を理由に説明したりして、自分達の問いを解決することができました。



友達と意見でつながる！

自分の意見に理由や根拠を付けて発表できるようになると、自然と子ども同士の意見が繋がるようになりました。授業像を意識して、何が必要かを考え、みんなで取り組んだ成果だと思います。また、理由や根拠の違いを比較して聞くことに楽しさを感じ、自分の意見にこだわりをもつ児童も増えました。同じ考えでも理由が違うと、「そういう考えもあるのか。」と反応したり、少し違う考えだったら、「私は違うんだけど。」と発表したりします。これらのようなことを積み重ねることで自分の意見に自信をもつことができ、主体的に学ぶ姿に繋がると考えています。自他の意見を比較して、自分の考えを深めていくことは、掛川市が掲げる「創像力・創合力・創律力」に繋がるものがあると考えています。



宿題を変えると授業も変わる！

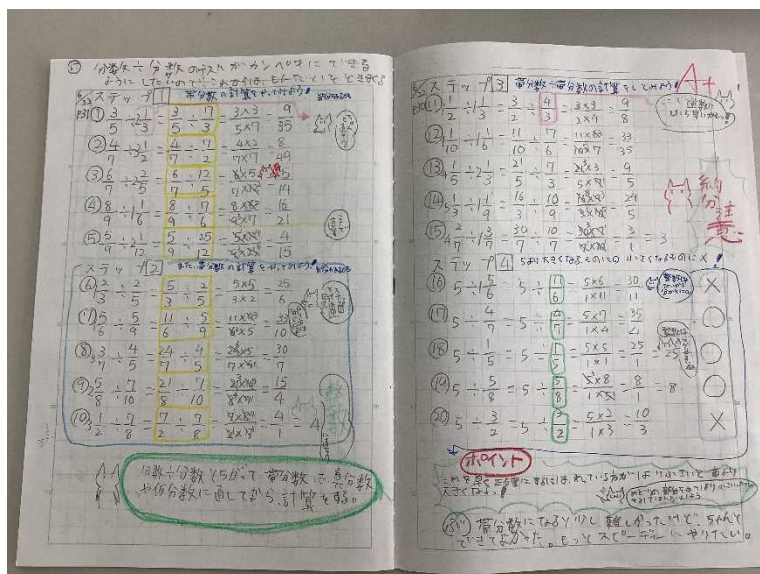
原谷小学校 川隅 翔太

宿題といえば、本読み、書き取り、計算ドリルが一般的です。子どもたちにとっては、宿題は本当に効果的なのでしょうか。そんな疑問をもち、宿題を改革してみることにしました。

その名も「けテぶれ」！！

物事に取り組む際、「何のためにやるか」という目的意識をもって取り組むことが非常に重要です。子どもたちにも目的意識をもって、宿題に取り組んで欲しい、そんな思いをもちました。そこで、PDCAサイクルの考え方を宿題に取り入れることにしました。しかし、PDCAサイクルの考え方は、大人にとっては当たり前であっても、子どもにとっては難しく感じるものです。子どもたちにとって分かりやすいように、P→計画（け）、D→テスト（テ）、C→分析（ぶ）、A→練習（れ）と言い換えることにしました。そして、ここに「けテぶれ」学習法が誕生したのです。

そうすることで、「け→何のために今日の宿題をやるのかを考え、テ→実際にテストのように学習に取り組み、ぶ→自分の苦手な部分に気づき、れ→苦手な問題に挑戦する。」という学習サイクルが生まれました。子どもたちは、宿題は先生に提出するものという考えから、自分のために取り組むものという意識に徐々に変化していききました。



分からなければみんなで取り組もう！！

しかし、急に始まった新しい勉強法です。子どもたちの中には、「やり方がよく分からない。」「難しい。」と感じる子が何人かいました。しかし、ここは学校。みんなで学ぶ場です。グループを作り、宿題のやり方を教え合うようになりました。勉強が苦手だと感じている子も、友達から教えてもらおうと自然と分からない

ことを次々と言い出すことができ、話し合いが終わった頃にはすっきりとした顔をしています。話し合いの時間の最後には、「さあ、今日の宿題頑張るぞ!」と、前向きに話す子もたくさんいました。子どもたちにとっては、仲間の助けが大きな後押しになっていることがよく分かりました。



いい宿題は、いい授業を創る！！

みんなで教え合うことは、授業にも影響を与えました。宿題の取り組み方の教え合いをたくさん行ったことにより、学級の中で教え合うことや分からないことを言うことが当たり前になってきたのです。授業中に分からないことがあれば、周りの友達にやり方を尋ねたり、手を挙げて「みんなと一緒に考えたいんだけど…」と発表したりすることが、次々と増えていきました。中には、「みんなが困らないように僕は、授業内容を予習してきたよ。」と先取り学習を進めてくる子も現れました。子どもたちが、学びに対して目的意識をもつことにより、学びに対する姿勢が変わり、学級の雰囲気や授業の雰囲気まで前向きになってきたのです。



大切なのは、「けてぶれ」マインド

ここまで、子どもたちの様子を紹介しましたが、大切なのは、「どのようにやるか」という方法論ではなく、「何のためにやるか」という目的をはっきりとさせて、子どもたちに意識させることだということがよく分かります。普段の生活でも、日頃の自分の行動を、計画、テスト、分析、練習を繰り返し、よりよいものにしていく子どもたちを育成することに取り組んでいきたいと思えます。

進めっ！原野谷川を守り隊！！

原田小学校 細野 雅希

新東名高速道路を駆け抜けるたくさんの自動車やトラック。併走するように流れる清流・原野谷川。その奥に連なる山々。目の前をトンビが優雅に舞う。教室から見える壮大な景色。「原田地区の自然を未来まで残したい。」そんな子どもたちの思いから、今年度の4年生の夢原里学習（総合的な学習の時間）がスタートした。

原野谷川はきれいな川なの？

春。4年生の教室では、11人の子どもたちの意見が真っ二つに割れていた。「原野谷川はきれいな川なの？」Sの発言から、「私の考えは、きれいだと思うな。」「え？ぼくは違うと思うけど。」と教室中で対話が始まった。なかなか意見がまとまらない。話し合いの末、実際に学区内を流れる原野谷川へ確かめに行くことになった。水生生物調査をすると、22種類もの生物を発見。そのほとんどがきれいな水に生息する生物で、水質検査から飲めるほどきれいな水だということが分かった。



「飲むことができるくらいきれいな原野谷川の環境を守りたい!!」というGの意見に、全員が賛同。子どもたちの思いは、いつの間にか一つになっていた。こうして「進めっ！原野谷川を守り隊!!」の活動が始まった。

原野谷川を守るには…森林が大切？！

夏。きれいな原野谷川を守るためにはどうすればよいのか、次なる疑問を解決するために、講師の方にお話をいただいた。すると、原野谷川の水源地は掛川市で一番高い山・八高山にあり、その水源地や周りにある森林の環境が原野谷川のきれいさと大きな関わりがあることを学んだ。原野谷川を守るには、周りの山が大切なのだ。子どもたちの視点は、原野谷川から周りの山や森林へと移り始めた。

秋。きれいな原野谷川を守るための森林環境について調べ学習を進めると、森林の手入れをしないとよりよい環境を作り出すことができないことが分かってきた。目の前にある原田地区の森林はどうなっているのか、実際に確かめるべく学校近くにある森林に行ってみると、木は伐採され、きれいに手入れされていた。





「この森林は、誰が手入れしているだ？」Hがつぶやいた。分からないことはプロフェッショナルに聞くのが一番。森林を管理している方々に話を伺い、疑問をぶつける。いろいろなことが分かってきた。すると、再びHがつぶやいた。「原田小のみんなも、地域の方々も、森林のこと、知ってるだ？」

原田小の児童と保護者に森林アンケートを取ってみると、驚きの結果が。こんなにも森林が身近にある生活をしているのに、ほとんどの人が森林のことをよく知らないではないか。このままでは、森林が大切にされない。森林が大切にされないと、原野谷川のきれいな環境も守ることができない。「どうすればいいだ？」とRがうなるようにつぶやいた。対話を通して考えた末に、「森となかよしになってもらえばいいじゃないだ？」とK。そこから「森となかよくなる」とはどんなことか、みんなで意見を出し合うことに。「よし、『川をきれいに森を元気にプロジェクト』をやろう！」というKの言葉が決め手となり、プロジェクトが始動した。

川をきれいに森を元気にプロジェクト

晩秋。講師の方から木のおもちゃや割り箸作りなどについて教えていただき、森となかよくなる方法を学んでいった。「原田小のみんなや地域の方々や森となかよくなるために、自分たちの手でできることは？」という問いに対して、子どもたちはiPadを使いながら、考えを創り上げていく。そこで辿り着いた答えが、イベントを開催して、原田小のみんなや地域の方々や森となかよしになってもらうこと。その名も、「にこにこネイチャーフェス」！



にこにこネイチャーフェス

冬。2月の参観会で開催を予定している「にこにこネイチャーフェス」に向けて、今まさに準備が進んでいる。「割り箸作り体験」「木のおもちゃ広場」「木のブランコ作り」「丸太のいす作り」「森林クイズ」など、すべてが原田の森となかよくなれるよう考えられた内容ばかりである。森となかよくなれば、きれいな原野谷川も守ることができる。子どもたちは自分の手でイベントを成功させるために、試行錯誤を繰り返しながら活動を進めている。

春が少しずつ近づいてきている。子どもたちの思いも、もうすぐ花開く。11人の「原野谷川を守り隊」が仕掛ける「にこにこネイチャーフェス」が楽しみだ。

自らが学び続ける授業を目指して

西郷小学校 松井 瑠美

西郷小学校では、子どもたちが自ら学び続ける授業づくりを通して、「共によりよく生きていこうとする子」の育成を目指してきました。

子どもたちが、課題を自分ごととして捉え、自ら学び続ける授業にするには、どうしたらいいのでしょうか。各学年の実践を通して、西郷小学校の取組を紹介します。

教師がぶれない授業を～授業のゴールを明確に～

5年生の算数科「どちらが速いか比べ方や表し方を考えよう」の授業。この単元で、この1時間の授業で、子どもたちに身に付けさせたい力は何かを考え、ゴールを設定し、授業を進めます。

西郷小では、「西郷型指導演案」を使って書くことで、つけたい力を明確にするようにしています。

つけたい力をつけるためには、どんな展開、どんな手立てが必要かを常に意識しながら、授業を組み立てていきます。こうすることで、ぶれない授業、何を学んだのかが子どもにも教師にも分かる授業を心掛けています。

どうして？話してみたい！～対話の場の工夫～

3年生の社会科「はたらく人とわたしたちの暮らし～店ではたらく人と仕事～」の授業。社会科見学でスーパーマーケットに行った後、お店がお客さんのためにどんな工夫をしているのか、発見したことを話し合いました。授業の後半、「どうしてキャベツを1玉と半玉で売っているのかな。」と子どもたち同士で対話する場面。

「人数が多い家族はたくさん使うよね。」「友達呼んでパーティーするときもたくさん使うかも。」「一人暮らしの人はちょっとでいいね。」と様々な視点で対話することで、自分たちの生活と結びつけながらより深い学びとなりました。

5年生2組 算数科学習指導要領			
1 日 時	2 場 所	3 単 元	4 単 元 内 容
令和4年7月13日(月) 第3時限	5年生2組教室	どちらが速いか比べ方や表し方を考えよう	① どちらが速いか比べ方や表し方を考えよう ② 比べ方と関係性(2) 関係性の二つの違いの整理
5 単元の評価目標	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	① 速さなど単位量あたりの大きさの理解及び表し方について理解し、それを求めることができる。	① 算数の二つの量の割合として捉えられる速さの関係を、時間・距離・速さ、時間・距離・速さの目的に応じて大きさを比較したりする方法を考え、それら日常生活に生かしている。	① さまざまな学習内容に取り組む意欲や学習態度の向上、学習の楽しさや面白さを感じ、積極的に学習に取り組むことができる。
6 単元について	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
	速さなど単位量あたりの大きさの理解及び表し方について理解し、それを求めることができる。	算数の二つの量の割合として捉えられる速さの関係を、時間・距離・速さ、時間・距離・速さの目的に応じて大きさを比較したりする方法を考え、それら日常生活に生かしている。	算数の二つの量の割合として捉えられる速さの関係を、時間・距離・速さ、時間・距離・速さの目的に応じて大きさを比較したりする方法を考え、それら日常生活に生かしている。
	① 本単元では、「単位量あたりの大きさ(1)」を受けて、単位時間に速さを求めたりして速さを捉え、速さの比較や速さの時間をもめていく。		
	② 速さの他や速さの表し方(時速、分速、秒速)やその相互関係の整理、速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	③ 本単元後半では、速さの比較や速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	④ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑤ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑥ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑦ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑧ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑨ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑩ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑪ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑫ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑬ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑭ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑮ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑯ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑰ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑱ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑲ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	⑳ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉑ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉒ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉓ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉔ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉕ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉖ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉗ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉘ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉙ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉚ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉛ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉜ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉝ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉞ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㉟ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊱ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊲ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊳ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊴ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊵ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊶ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊷ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊸ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊹ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊺ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊻ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊼ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊽ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊾ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		
	㊿ 速さの求め方の整理・整理を目的として整理していく単元である。		



1年生の国語科「せつめいする文しょうをよもう～じどう車くらべ～」の授業。クレーン車がどんなつくりをしているのか、なぜそのようなつくりになっているのかを考えました。教科書の本文に書かれていることを、実際に自分たちで動作化してから対話することで、考えを深めました。



なるほど！わかった！実感！～ICTの活用～



授業の導入でICTを取り入れることで、視覚的に分かりやすく問題に取りかかることができたり、実際の人や物の動きなどを確認できたりします。子どもたちが、「なるほど！わかった！」を実感できるように活用しています。

また子どもたち自身も、調べ学習や学んだことを表現するものとして活用しています。どうしたら相手に伝わりやすいものになるのかを考え、試行錯誤したり、こだわったりすることでよりよいICTの活用ができています。どんどんICTの操作に慣れていく子どもたちです。



来年度に向けて～子ども同士で深め合う集団へ～

今年度西郷小では、自ら学び続ける授業作りを目指して取り組んできました。①子どもたちにどんな力をつけたいのか、ねらいを明確にすること、②考えを深めるための発問・対話の場の工夫の2点について研修を深めてきました。その中で、ただ対話をさせることが効果的なのではなく、目的をもった対話や既習事項や子どもたちの生活経験と結びつくような対話がより効果的なものになることが分かりました。

来年度は、子ども同士の対話や関わりを通して、問題を解決する楽しさや難しさ、やりがい、挑戦をより感じさせられる授業を目指したいと思います。

「～たい」でいっぱい倉真っ子！

倉真小学校 池田 勇太

倉真小学校は、ふれあい体育祭やふれあい祭り、ジャンボ門松作りなど地域の方と一緒に活動する行事がたくさんあり、地域との繋がりも多く地域に愛されている学校だ。全校の人数は少ないが、学年関係なく関わり合う子どもたちは、いつも笑顔いっぱいである。

授業では、今年度も「知りたい」「やってみたい」「解決したい」「話したい」「聞きたい」「教えたい」など、「～たい」でいっぱいの授業を目指してきた。特に今年度は「考えたい」が生まれる学習問題作りを研修してきた。

3年生 理科「風やゴムで動かそう」

まとめの授業としてグループで協力するゲームにチャレンジ。今回の授業の課題は「輪ゴムカーを3回走らせてぴったり100点を取る方法を考えよう。」

ゴムの本数やゴムを引く長さによってゴムカーがどれだけ進むかを経験してきた子どもたちは、「15cm伸ばせば10m進むって分かっているから50点を1回目で取ろう。」
「60点、30点、10点を取ればぴったり100点だから・・・」とこれまでの授業の結果を生かして作戦を立てていく。

作戦通り行くのか。さあスタート！

「よしっ。狙い通り30点。」

「あっ40点になっちゃった。」

「大丈夫。大丈夫。作戦を変えて、次は20点を狙おう。」

作戦を考える。しかしうまくいかない。そこでまた考える。

「楽しそう」「思ったようにうまくいかない」という思いが、「考えたい」に繋がっている姿が見られた。



2年生 国語「想像したことを音読劇で表そう」

ICTを取り入れた授業実践を引っぱっている、我が校の情報主任の先生の授業。事前の研修で、「学習のまとめは、音読劇発表会。そのゴールのために、学習したことをしっかりと積み重ねていきたい。それには、やはりICTの『蓄積と共有』の力が必要。」と伝えられた。そして、公開授業。

「お手紙の内容を聞いて、がまくんはどんな気持ちになったかな。」

「すごく嬉しかったらあ。」

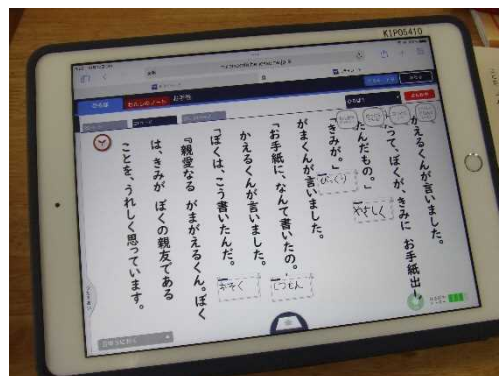
「元気が出たと思う。」

がまくんの気持ちが変わったことに気付く子どもたち。

「じゃあ、がまくんの台詞はどう読んだらいいかなあ。いつものように工夫することを書きましょう。」

教師の言葉掛けに反応良く、iPadを開く子どもたち。そして、iPad上の本文にメモを書き込んでいく。2年生とは思えないほど、使いこなしている。これまでの授業でICTを使う力が確実に積み上がっていることに参観者は驚いた。音読の読み方のメモはグループごと共有され、蓄積されていく。

音読劇の練習をする時には、がまくんとかえるくんの心情の変化に沿って読むための欠かせないメモが出来ていた。



5年生 社会科「未来をつくり出す工業生産」

教室に入った瞬間に分かる活気ある雰囲気。

「世界初のガソリン車を見てみましょう。」「1920年代の自動車はこちら。」「現在の車を見てみよう。」

教師が掲示する車の資料に、

「これが最初かあ！遅そう。」「三輪車みたい。」「おー！風を受けそう。」「今のは、やっぱりかっこいい。」「新幹線みたいになってる。」

1枚1枚の車の写真に大きな反応。そして、次々と気付きが出される。5年生の子どもたちが新しいことを学ぶことにわくわくしている。その雰囲気が学級全体に広がっていた。昔と今の工場の様子から生産量が格段に上がった背景を読み取るため、個々のiPadに2枚の写真が送られた。



「これだけで考えるの?」というつぶやき。しかし、そんな心配は必要なかった。送られた資料に目を凝らして真剣に見る子どもたち。そして、次々と続く発表。一人ひとりの発表に「ああ本当だ。」「確かにそうかも。」「もしかしてそれって・・・」2枚の写真から授業者の予想を越える気付きが出され、新たな疑問も生まれた。自動車生産について「もっと知りたい。」が生まれた授業であった。

「～たい」でいっぱい授業がそこにあった。新しいことを学ぶ楽しさをどの教科でも積み上げているからこそ、一つのことから多くを学ぶことができる学習集団に育っていく。



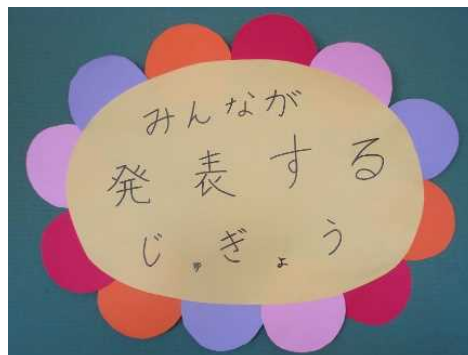
3匹のカエルとアップする子どもたち

土方小学校 平松 哲也

3匹のカエルとウォーミングアップ

新学期、授業がスタートするにあたり、クラスが目指す授業像について学級会を行い、“みんなが発表する授業”に決定した。これを目指していよいよ授業がはじまった。

本校では、授業のまとめの段階を“振り返り”と呼び、そこでは3匹のカエルが登場する。1匹目は、どんなことができるようになったか、分かったのかを表す緑色の“できたわかったカエル”。2匹目は、どのようにして考えが深まったか、変化したかを表す黄色の“よくかんガエル”。そして、3匹目は、次の授業ではどんな学習を行い、考えたかを表す赤色の“次につなゲ〜ル”である。これから、この3匹のカエルとともに子どもたちは成長していくことになる。



それぞれの変身・ステップアップ

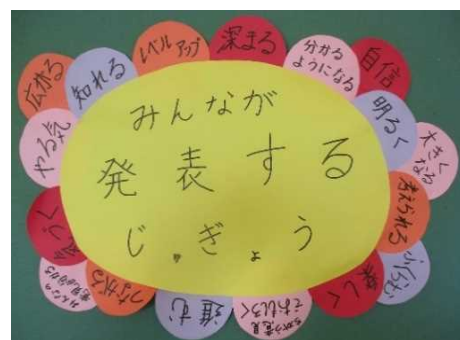
“みんなが発表する授業”を目指すために、話し合い活動に力を入れていった。それにより、“〇〇さんに似ていて”などの繋げる言葉が増えていった。

そこで、特に話し合いを中心とした授業で“挙手なし発言”を取り入れた。手を挙げて教師が指名するスタイルから、話し合いの中でタイミング良く自分から進んで立って発言をするスタイルに変えた。子どもたちは、2～3時間は戸惑いを見せていたが、自分の出番を見つけて発言し、それがだんだんと繋がっていくようになっていった。



しかし、“みんなが発表する授業”への達成感はあまりなかった。子どもたちは、クラスの全員が発表することがゴールであると考えていたからである。

みんなが発表すると、どんないい効果があるのかについて考えてみた。子どもたちから“考えがふくらんでいく”や“考えが広がっていく”などの意見が出た。そんな授業をクラスで目指していこうと確かめ合った。



自分の言葉で振り返りをする
ことができる子どもたちだが、も
っと3つの視点を意識させる
ために、カエルにシールを貼
っていく取組を行った。

最初は“その意見は赤カエル
だね”などと教師が指摘して
シールを貼らせていたが、し
だいに自分自身で振り返りの
視点を判断ができるようになって
いった。しかし、緑色や赤色カ
エルはどんどん変身していった
が、黄色カエルはそのままであ
った。



そこで、振り返りの中に“〇〇
さんの意見でよく分かりまし
た”など、友達の名前を入れる
よう指導した。それにより“ど
うして分かったのか”“どのよ
うにして考えが変化したのか”
について振り返ることができる
ようになった。黄色カエルにシ
ールが貼られ、3匹のカエルは、
どんどん変身していった。

4匹目のカエルとジャンプアップ

挙手なし発言でもスムーズな
話し合いができたところで、4
匹目のカエル“意見をつなゲ
〜ル”を登場させた。このカ
エルが登場したら、教師は口
を挟まずに約10分間は子ども
たちに話し合いを任せるよう
にした。

それにより、新しいつなげる
言葉“〇〇さんの意見で思っ
たんだけど”を使って、新しい
考えを生み出す子が出てきた。

また、“〇〇さんの振り返り
の、こんなところがいい”の
ように友達の振り返りの良さ
を見つけながら交流させるこ
とで、授業の振り返りが、そ
の時間の確かめ合う時間にな
っていった。



意見をつなゲ〜ル

更に、以前から取り組んできた
キーボードタイピングで振り返
りを入力するようにした。多
くの子が5分間で200文字以
上入力することができるよう
になった。

パワーアップした子どもたちとカエルと教師に

このように4匹のカエルととも
にジャンプアップしていった
子どもたちだが、子どもたち
の力だけでは学習を深める方
向へ進まないことが多い。

そのためには、話し合いを深
める方向に導くために教師の
出番が必要になってくる。ど
んな切り返しをどのような
タイミングでしたらいいのか、
教師もパワーアップしなければ
ならない。



また、この時間は十分に話し
合いさせる、この時間はしっ
かりと振り返りをさせる、単
元計画にめりはりをつけて臨
むこともパワーアップする1
つの手立てだと考える。

保健の授業も対話を通して深める

佐東小学校 池田 紀子

「保健の授業」と聞いて、どんな授業をイメージするでしょうか。「教科書を読んで、先生が一方向的に説明をして、プリントにまとめる。」そんな授業をイメージする人が多いと思います。本校は、「対話を通して考えを深める授業」を研修主題に教育活動を行っています。保健の授業でも、子ども達同士が対話し、学びを深めていく、そんな姿を目指し授業を仕組みました。4年生の授業を紹介します。

女の子はどっち？

授業は、クイズからスタートしました。まずは、声のクイズ。1年生の男の子と女の子の音声を聞いて、どちらが女の子か当てるクイズです。「え～分かんない！」と子ども達。次は大人の男の人と女の人。「これは簡単！」「子どもは、どっちも声が高いから分からないんだよね。」と自然と子どもと大人の違いをつぶやいていました。「今、子どもから大人になる境目の勉強をしているんだね。前回勉強したことは？」と先生が聞くと、子ども達は口々につぶやき始めました。「がっしりしてくる。」「腰回りがしっかりしてくる。」クイズを通して、ぐっと頭の中が保健モードになりました。

あなたなら、どんなアドバイスをします？

「こういう体つきの変化が出てきたときに、こんな悩みが出てくる人がいるんだ。」と言って、先生は模造紙を貼りました。

発毛があるんだけど、来年の自然教室のおふろの時、何か言われたら嫌だし、恥ずかしいなあ。

「あなたたちが、よきアドバイザーになって、この子を笑顔にしてあげてほしいんだ。今まで学習したことを生かして、できそうかな。」「うんうん。」と子ども達。「では、ワークシートに名前を書いた人から始めよう。」ここから、子ども達に任せられました。一人でじっくり考える子や、二人組で考える子達、「一緒に考えよう。」と声を掛け合い4、5人で相談し始める子達。Aさんは、男子の5人組で話し始めました。「恥ずかしいから、タオルで隠せばいいよね。」とAさん。「剃ればいいんじゃない。」「でも痛いかもよ。」「隅っこで見られないようにすればいいんじゃない。」少し恥ずかしそ



うに、でも「自分だったら…」と想像してみんなで一生懸命話し合いました。

タオルで隠せば、悩みは解決するの？

5分くらい経つと、先生から子ども達に、このような言葉が投げかけられました。「タオルで隠すって言っている人がたくさんいるんだけど、それって発毛が恥ずかしいってこと？隠せば悩みは解決するのかな？恥ずかしいっていう思いに寄り添ってあげられるといいね。」その言葉を聞



いて、男の子達の会話が変わりました。「みんなもいつか起こることだよ。恥ずかしいことではない。」「自分もいつか生えるから、普通はお互い毛のこと言わないよね。」「自分だって言われたくないしね。」Aさんも、「多いとか言われそうじゃん？不安だよ。でも、みんな同じことになるから気にしないでって言えばいいんじゃないかな。」と言って自分のワークシートに書きました。その後は、グループを出て、男女関係なく、積極的に他の子と関わり始めました。「なるほど、似てる。僕は…」と意見を交換したり、「その言葉いいね。」と言って友達の考えをワークシートに書き足したりしました。その後、iPadのアプリ「ムーブノート」を使い、関われなかった子の意見をじっくり読み、自分の考えと比べていました。先生からの言葉やいろいろな子達との関わりを通して、Aさんの考えは深まり、Aさんの中で確かなものになっていくのを感じました。



大人になるためにみんなが通ってきた道

最後に、養護教諭から話がありました。「なぜ腰回りが大きくなったり、発毛が起きたりするのかわかるのか、それには理由があったよね。不安になることもある。でも、みんなが通ってきた道。先生でも、家族でもいい。不安なことがあったら相談してね。」子ども達は、ワークシートに振り返りを書き、この授業は終わりました。

1年を通して

「対話を通して考えを深める授業」を目指し授業を行ってきたこの1年。「対話をするとうれしい。」「対話をするとうちの考えが変わったり、新しい考えができたりする。」と対話のよさを実感する子が増えてきているのを感じます。また、子どもの考えを深めるためには、教師である私たちが、子ども達に、何に注目させるのかが大切だということも分かりました。教師も子ども達の対話の中に入っていき、子ども達の新たな学びにつながるような言葉をかけ、一緒に学んでいきたいです。

自分事として取り組み、

学びの過程を楽しむ子とは

中小学校 深谷 享平

学校が好きで、課題に意欲的に取り組むことができる中小の子どもたち。私たちは、そんな子どもたちの「自分事として取り組み、学びの過程を楽しむ子」とはどのような姿なのかをイメージして授業づくりをしてきました。また、考えを深めるための手立てとして、iPadを活用した授業づくりにも取り組みました。その実践を紹介します。

学習問題は子どもたちから

3年生社会科「店で働く人と仕事」の授業です。最初に、担任がレジの仕事の見本を見せます。担任がエコバッグに雑に商品を放り込む姿に、「それじゃだめ。」「優しくしないと。」

「大きい物から入れなくちゃ。」とつぶやきが生まれました。担任がそのつぶやきから、「レジの



人も今言ったみたいに工夫して仕事をしているんだね。他の仕事の工夫も知りたいよね。じゃあ今日の学習問題は。」と問い掛けると・・・。何人かがつぶやき、

「お店で働いている人は、どんな工夫をしているのだろう。」という学習問題が出来上がりました。子どもの知りたい、やりたいから引き出した、子どもから生まれる「問い」の誕生です。

子どもたちは、担任が作成したスライド資料から、お店で働く人の仕事の工夫を探します。スライドの資料は、鮮明でアップして見ることができるので、子どもたちは資料との対話に夢中。もともと班の隊形から授業が始まっているので、自然と会話が生まれます。「料理を作る人は、手袋やマスクをしているよ。」「商品を運ぶ人は、同じ商品ごと積むようにしているよ。」

などと多くの考えを伝え合いました。

iPadの資料や対話を通して、子どもたちから生まれた学習問題について、最後まで考え続けることが出来ました。



自分たちで学びタイム

5年生家庭科「食べて元気！ご飯とみそ汁」の授業です。どんなこだわりのみそ汁を作るか考える活動に取り組む子どもたち。iPadのみそ汁の具材資料を使って、自分の考えを作ります。

子どもたちは、自分の考えがまとまったら、自然に「自分たちで学びタイム」がスタート。「自分たちで学びタイム」とは、子どもたちだけで考え、話し合う時間です。2、3人のグループになって、説明が始まります。「うちには小さい妹がいるから、細かく刻んだ具を入れるよ。」「3つの色が入った栄養のバランスがよい食材を選んだよ。」と説明したり、「そうそう。私もそうしたよ。」と反応したりしています。

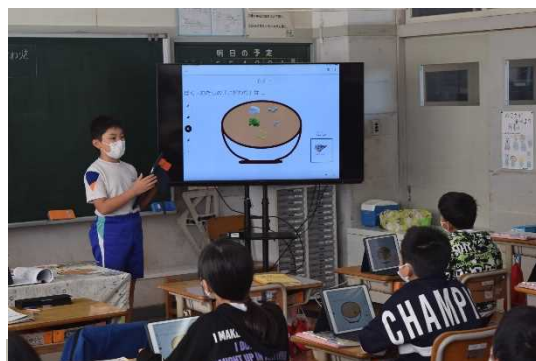


しばらくするとAさんが「みんな席に着いてください。」とクラスみんなに声を掛けました。5年生のクラスでは、全員で話し合う場面も子どもたちから自然と司会をやる子が決まり、発表者を当てていきます。

A：「Bさん発表してください。」

B：「はい。ぼくは、豆腐と大根を具材に選びました。だしは、にぼしから取りたいと思います。こだわったところは、自分でもできることと前の授業で飲んだにぼしのだしがおいしかったので、使いたいということです。」

このように、「自分たちで学びタイム」では、子どもたち主体で楽しみながら学んでいます。話題にのぼらなかったこだわりについては、担任が提案し子どもたちの思考を活性化させていきます。



自分事として取り組むために・・・

これからも、素直で意欲的な中小の子どもたちの良さを大事にし、「自分事で行い、学びの過程を楽しむ子」を目指して授業づくりに取り組んでいきます。さらに、子どもたちを成長させるために中小では、「言葉」を大事にしていこうと考えています。教師が子どもたちに問いかける言葉一つでもっと授業が活発になっていくことでしょう。教師も子どもたちも言葉にこだわるようにしていきたいです。

学びを深める国語科の授業づくり

大坂小学校 岡戸 良太

令和4年度、大坂小は「主体的に関わり合って学びを深める子」を育成するために、国語科を中心に授業づくりを進めてきました。それは、「毎日行われる国語科の授業をもっと良くしていきたい。」「普段の様子や全国学力・学習状況調査の結果から、大坂小の児童に国語科の力をもっとつけたい。」といった職員の声から生まれたものでした。また、教科を限定したことで、全職員足並みを揃えて研修に取り組み、研修をつなげていくことができました。

国語科の実践①

(1)6年「作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう」(教材名「やまなし」)

初めに実践したのは、宮沢賢治の「やまなし」という教材。一読しただけではよく分からない難解な作品と言えます。そこで、授業者は、作品の世界を捉えさせるために、

- ・「5月」と「12月」を対比させること
- ・賢治の人生や生き方を記した「イーハトーヴの夢」を根拠として自分の考えをつくること

の2点を手立てとして示しました。

すると、6年生の児童は、「『場面を比べて読む⇨対比を使う』と宮沢賢治の世界がよく分かる」と気付くことができました。また、本文を根拠に自分の考えをつくっていけば良いと分かりました。さらに、3人で話し合いを行うことで、自分の考えを伝える必然性が生まれ、多くの子が活発に話し合いました。3人組での話し合いの有効性もこの実践で示されました。



常葉大学教授 中村孝一先生の講話

大坂小の職員は、「もっと国語科について勉強したい。」と考え、夏休みに常葉大学教育学部で国語科教育学・児童文学を研究している中村孝一先生を招いて、国語科について話を聞くことにしました。理論を学び、普段の授業の実践と結び付けて考える良い機会となりました。



中村先生の主な講話内容

- ・何ができるようになるか、コンピテンシーベースへの転換を
→汎用性をもった読み方を身に付ける。
- ・論理的思考力を踏まえた発問の意識改善
→根拠と理由付けを分けて考える。
- ・子どもの思考のセンサーに触れるような見方を教師が与える
→「それってどうなの?」「やってみたい。」「考えてみたい。」と思えるような見方を与える。

国語科の実践②

(2)3年「場面を比べながら読み、感じたことをまとめよう」

(教材名「ちいちゃんのかげおくり」)

2つめの実践は、3年生の戦争教材である「ちいちゃんのかげおくり」。ちいちゃんの視点と読み手の視点で、かげおくりの様子を読んでいきました。夏の中村先生の講話を受けて、ここで育成を目指す資質・能力は何なのかを授業者がしっかりと考えて授業に臨みました。



そして、単元を通して、「考え・根拠・理由付け」を何度も意識させたことで、「考え・根拠・理由付け」を意識した読み方が定着していきました。

(3)1年「すきなところはっぴょうかいをしよう」(教材名「たぬきの糸車」)

3つめの実践は、1年生の物語文である「たぬきの糸車」。たぬきの行動を動作化したり、おかみさんの気持ちを想像したりして読み取っていく学習です。前回に引き続き資質・能力を明確にして単元を構成し、さらに前の単元や次の単元とのつながりを意識して実践に取り組みました。

障子や糸車など実物を用意したことで、1年生の児童が次々とたぬきの行動を想像して動作化に取り組んでいきました。友達の動きをよく見て、「ここはこうだよ。」「教科書に〇〇って書いてあるじゃん。」など、主体的に学びに向かう姿が見られました。



さらなる深い学びを目指して

今年度大坂小の研修がつながり、どの学年でも育成すべき資質・能力を明確にして授業づくりをしていくことが児童の深い学びに重要であると分かりました。今年度の学びを次年度の研修につなげ、主体的・協働的に学びを楽しむ児童の姿を目指していきます。

「主体的に学び合う子を育成するための 教科等指導の在り方」

千浜小学校 富井 美帆

主体的に学び合うために

本校の研修主題は「主体的に学び合う子を育成するための教科等指導の在り方」です。自分事として課題を捉え関わり合いながら、自分の考えを広げ深めることができる子どもたちの姿を目指しています。そこで本校では、①自分事として捉えることができる学習問題・課題、②話したくなる・協働したくなる対話の場の設定、③文房具としてのICT機器の活用に取り組んでいます。では、実際にどのような授業を行ってきたのか、本校の取組を紹介します。

自分事として課題を捉えて意欲的に

3年1組で行った総合的な学習の時間の授業。学校のHPの更新者から、千浜のことを広めたいが何について広めるべきか迷っていてみんなの力を貸して欲しいと頼まれました。子どもたちは「やりたい！やりたい！」「僕たちに任せて！」と意欲的に取り組み始めました。千浜のことをHPで紹介しようをめあてに自分たちが調べたことをもとにして、HPの紹介ページを作ります。でも、千浜って何が有名なの？…



子どもたちは、まず千浜地区の探検に出かけました。「さつまいもを育てているところがあるよ。」「田んぼや畑がたくさんあるよ。」「大きな工場もあるよね。」と改めて千浜地区にはどんな特色があるのか知ることになります。しかし、僕たちが探検したことだけで千浜地区の特色を決めていいのかな？…と新たな疑問が生まれます。そこで、さらに千浜地区のことを調べるために他学年や家族、地域の人にもアンケートをとりました。その後、HPに載せることを絞り、載せるページのレイアウトを決めていきます。

子どもたちは、「自分たちが調べたことがHPに載り、いろいろな人に千浜のことを知ってもらえるからがんばりたい」と課題を自分事として捉え、意欲的に取り組む姿が見られました。

話したくなる・協働したくなる対話の場

4年1組で行ったのは社会科「水はどこから」の授業。自分たちが使用している水がどこからどのようなことを経て、手元に届いているのかについて学習します。まずは、世界の国々ではどのような水を使っているのか写真を見てみると、子どもたちは「こんなに汚い水飲むの。」「日本人は、水が飲めるのが当たり前だけど、世界では違うんだね。」と日々飲んでいる水について興味をもち始めます。そこで、雨水がみんなのもとに届くまでに、どんなことをしているのだろうと、自分たち



のところへ届くまでについて予想を立てることにしました。子どもたちは、「まずは、雨水を貯めておく必要があるよね。」「ただの雨水じゃ飲めないから、きっときれいにする工場みたいなものがあるよね。」など、様々な予想を立てていきます。予想が立ってくると次に、「水をきれいにする機械ってどんななのかな。」「ダムって何のためにあるのかな。」「水を運ぶパイプはどのくらいの深さにあるのかな。」と話し合う中で次の課題へとつながっていきました。

I C T を 効 果 的 に 活 用 し て

1年1組で行ったのは国語科「うみのかくれんぼ」の授業。最初に、いろいろな海の生き物の隠れ方クイズを出します。子どもたちは、「ここに隠れているよ。」「隠れているとわからなくてすごいね。」と生き物の隠れる姿に驚きます。そこで、単元の最後には自分が興味をもった生き物の『かくれんぼクイズ』を出し合うことを伝えます。教科書の文を学習する中で、クイズを出すときには、「隠れている場所」「体の特徴」「隠れ方」が必要だと学び、いよいよクイズ作りに挑戦します。

今回は、一人一台端末である iPad を使用してクイズを作りました。一人一冊の本を準備するのは難しいのですが、iPad を活用することで自分がクイズ作りの参考にしたい本のページを写真に撮り、隠れている場所や隠れ方などじっくり読みながら、クイズに必要なことを探せます。また、iPad に写真を取り込み、実際に写真を見せ合いながらクイズを出し合いました。子どもたちは、「ぼくの調べた生き物と隠れ方が似ているね。」「他の生き物も調べてみたいな。」と興味関心をもちながらクイズを出し合うことができました。



今後も子どもたちが「やってみたい。」「なぜかな。」と自分事として課題を捉え関わり合いながら、自分の考えを広げ深めることができるように、教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいきます。

自分もみんなも大切にする子

横須賀小学校 阿形 竜馬

令和4年度の横須賀小学校の教育

今年度の学校教育目標は「自分も みんなも 大切にする子」でした。この目標を達成するために「友達のことを大切にして聴く」と「自分に対する信頼を高める」について全校一丸となって取り組んできました。

「友達のことを大切にして聴く」では、他者意識を育てることや人のことを大切に生活という優しさにつなげるために、授業などにおいて相手を大切にする聴き方について全校で取り組んできました。

「自分に対する信頼を高める」では、相手に優しくできる自分への信頼を高めていくために、友達の良さを価値づけたり、自分の良さについて振り返ったりする活動に全校で取り組んできました。

自分もみんなも大切にする子

1. 友達を大切にする聴く

を育成するための実践

本校では、友達を大切に聴き方を身につけることで、授業の質の向上につながるのではないかの仮説のもと、研修を積み上げてきました。

まず「聴き手」の育成に取り組んできました。授業では、友達の発表や教師の説明などにおいて耳を傾けるだけでなく、話し手の方を見て聴くことを徹底しました。

次に、聴き手が発表をよく聴けるように話し手の育成にも取り組みました。黒板の前へ積極的に出て話したり、周りに見てもらえる位置に移動してから発表したりするなど、聴くために話し手の工夫にも取り組みました。

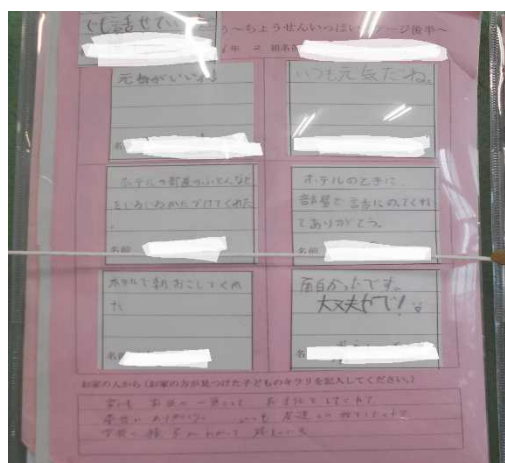
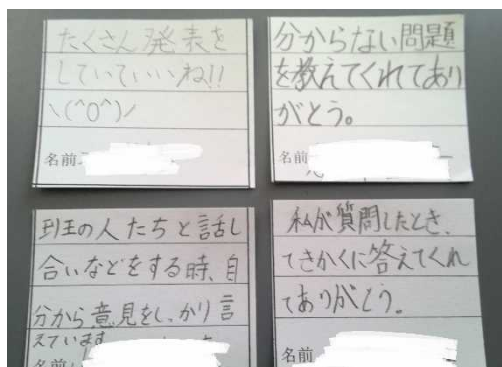


2. 自分に対する信頼を高める実践 ～ お互いを認め合う「キラリカード」～

本校ではお互いを認め合う活動として「キラリカード」の取組を行っています。キラリカードとは、小さな紙に友達の良さや頑張りを書いてその友達に渡すという物です。

各教室にはキラリカードを入れるポケットが付いている壁掛けが掲示されており、もらったカードをそこへ保管します。そして2ヶ月に1度たまったカードを保護者に見てもらい、保護者から子供へのキラリのコメントを書いてもらうようにしました。

今年度は昇降口にもキラリカードを掲示し、全校児童で共有する取組も行いました。友達の良さを価値付けたり、自分の良さに気づいたりすることで互いに認め合うことが出来ています。



3. 創立150周年に向けて

本校は来年度（令和5年度）で創立150周年を迎えます。それに向けて本年度はマスコットキャラクターを児童から募集し、「よこしょーくん」に決まりました。本校の象徴でもあるむくの木や校章が取り入れられており、親しみやすいキャラクターです。

地域にとっても自慢の小学校になれるよう、自分もみんなも大切にしていきます。



考えたくなる国語の授業への挑戦

大淵小学校 浅場 翔太郎

「え～難しい。」

「そんなの、書けないよー。」

4月当初、勉強、特に国語に苦手意識をもっている大淵小の6年生からこのようなつぶやきが聞こえてきた。子どもたちの変容を追ったドキュメンタリーが今始まる。

「根拠・理由を明確にして 自分の考えをもてる子」を育てる授業を目指して

大淵小学校は、国語科を窓口教科とし、ここ3年間研修に励んでいる。令和2、3年度は説明文、本年度は物語文を中心に「根拠・理由を明確にして 自分の考えをもてる子」を育てる授業というテーマに向かって研修を行ってきた。国語に苦手意識をもっているのは、何も子どもたちだけではない。教師の中にもいるのである。どちらにしても、答えがはっきりとしない曖昧さがあることが、国語が苦手な理由のようである。しかし、読んだり書いたり、話したり聞いたりすることは、学校生活だけでなく、社会生活において大切な力である。だからこそ、国語を好きな子が増えるようになってもらいたいという願いが教師の中で湧いてきた。

考えはもてるが・・・

さて、6年生に戻ってみよう。苦手ではあるものの、一生懸命取り組むことができるよさがある子どもたちである。最初に学習した物語文「帰り道」では、律と周也の二人の視点から描かれている作品に自分たち自身を重ね合わせながら一生懸命考えていた。根拠や理由をはっきりとさせながら、自分の意見をもつことができていた子もいた。しかし、意見があっても自信がなくて伝えがらないのである。相手に伝えることに対して大きな抵抗があることを担任は感じた。

発問の工夫と学習の足跡が学びを活性化～iPadの活用～

そこで、宮沢賢治の「やまなし」を学習する際に、担任は、たくさんの手立てを用意して、授業に臨んだ。まずは、ゴールの姿をはっきりとさせること。「作者と作品を紹介するリーフレットを作成する」という活動を設定し、図書館司書にもブックトークをしてもらいながら、導入を行った。難しそうだが、なんだか面白そうな活動であることを知り、子どもたちのやる気に火が付いた。

「『雨ニモマケズ』から分かる宮沢賢治さんは？」

「宮沢賢治さんは、どのような生涯を歩んだのか？」

「宮沢賢治さんは、どんな人柄でどのような理想や夢をもっていたのか？」

「やまなし」の作品に入る前に、作者について学習した。担任は写真資料も入れながら丁寧に壁面掲示を行い、いつでも振り返ることができるようにした。そして、いよいよ「やまなし」の物語に入った。不思議な物語との出会いにかなり戸惑



った様子だった。「全然よく分からない・・・。」とつぶやく子どもも少なくなかった。しかし、子どもたちに、宮沢賢治の世界観を感じ、作品の魅力を味わってもらいたいと強く思っていた担任は、めげるわけにはいかなかった。

子どもたちのつぶやきを拾いながら、「五月」と「十二月」の谷川の様子を黒板にまとめていった。板書したものは子ども一人一人の iPad に送り、自分で好きな時にすぐに見ることができるようをしたり、壁面に掲示して学習の足跡が残るようにしたりした。作品を読み進め、自分たちで考えてきたことが少しずつ増えてくると、今まで学習したこととのつながりを意識する子どもも出てきた。そして、作者のことがだんだん分かってくると、「やまなし」に対する関心が増し、「分からない・・・。」と言っていた子どもたちが、「賢治さんがみんなの幸せを願って生きてきたから、『やまなし』が『かに』に幸福感を与えるストーリーを描いたんじゃない？」と自分の意見をもって相手に伝える姿が見られるようになった。



学びを見渡すことのできる掲示、子どもたちの実態に合わせたワークシート、手元で学びを振り返ることができる ICT の活用など、様々な手立てを講じたことで、子どもたちの学びを支援できた。また、ペアや小グループなどでこまめに話し合う時間を設けたことも、自信のなかった子どもたちが、考えを深め、自分の意見をもったりいろいろな情報に関わらせて考えたりすることができるようになる一助となった。子どもたちが、大きく変わってきたのである。



アンケート結果から見えるもの

6年生に国語に関する実態アンケートをとってみると、「国語が好き・がんばっている」という項目に対し、1学期末の結果は76.2%、2学期末は77.3%と徐々に上がってきた。「国語の授業で自分の考えを發表しているか」という質問項目に対しては、50%の子が「よくあてはまる・あてはまる」と答えている。「根拠・理由をはっきりとさせて友達に自分の考えを伝えているか」という質問項目に対して59.1%の子が「よくあてはまる・あてはまる」と答えている。多くの子が苦手意識をもっていた国語で半数以上の子が肯定的な評価をしていることは、着実に子どもたちが変化していることの証拠である。



これから子どもたちは中学という新しいステージへ進む。国語の楽しさ、友達と関わるよさを実感し、がんばっていく。これからも一人一人が学ぶ楽しさを実感し、みんなで「創像」したり「創合」したりできる教育活動を行っていきたい。

学び合い やり抜く 栄中生

栄川中学校 田中 郁美

緑豊かな自然に囲まれた栄川中学校。学区北部には、「茶」の文字で有名な標高532メートルの粟ヶ岳がそびえる。ここ栄川中学校には、122人の生徒がおり、毎日元気に登校してくる。路線バス、スクールバス、自転車、徒歩、それぞれ交通手段は違えど、学校に登校すればみな同じ1つの目標「学び合い やり抜く 栄中生」に向かって生活する。そして、日々「ものがたり」が生まれる。ここでは、その「ものがたり」のほんの一部を紹介する。

「進んで関わり学び合う子」へ

栄川学園では、学園共通の研究テーマ「進んでかかわり学び合う子の育成」に向け、各園・校で年齢や実態に合わせたサブテーマを設定し、12年間の一貫した学びの完成を目指している。栄川中では、「生徒が学び合いたくなる問いの設定」をサブテーマに設定し、「自分から『考えよう』『解決しよう』『表現しよう』とする姿」「自分と他者の考えを比べ、対話によって深める姿」を目指す生徒の姿として校内研修を行ってきた。まず、「学び合い」について、教師が共通理解するための話し合いを行った。ここでは、「学び合い」はあくまで目標を達成するための手段の1つであることを再確認した。6月の栄川学園合同一貫研修会の公開授業においては、どのクラスにも生徒の学び合う姿がみられた。1年生の社会科の授業は、「アジアで今後更に成長できる地域について根拠をもとにプレゼン資料をつくろう」の課題に取り組んだ。「この考え方って人口だよね！」と生徒が生徒同士の意見を繋げ、学び合う姿があった。これはまさに、「自分と他者の考えを比べ、対話によって深める姿」であった。

栄川中 校内研修の合言葉

令和4年度 一貫合同研修
<研修テーマ> 進んでかかわり学び合う子の育成
<目指す子どもの姿>
小・中学校 ・自分から「考えよう」「解決しよう」「表現しよう」とする姿
・自分と他者の考えを比べ、対話によって深める姿
幼稚園 ・自分の思いや考えを言葉で伝える姿
・友達のことを聞きながら、友達といっしょに遊びを楽しむ姿

令和4年度 栄川中 校内研修
<研修テーマ> 進んで関わり「学び合う」生徒の育成
～生徒が学び合いたくなる問いの設定～
<目指す生徒の姿>
・自分から「考えよう」「解決しよう」「表現しよう」とする姿
・自分と他者の考えを比べ、対話によって深める姿
※「学び合い」… 自分の考えをもち、他者と考えを伝え合うことで、
自分の考えを広めたり深めたりする
「学び合い」は目標を達成するための手段の1つ

子供主体の学びの探求 ～静香教育事務所からの授業改善メッセージ～
視点をもとに、ご自身の授業をセルフチェックしてみてください！
視点① 深い学びにつながる単元構想
 子供が追求したくなるような問いでしようか？

「だれもできないかもしれない」

11月、地域支援課指導訪問があった。今年度の中心授業は体育の授業。研修推進委員会や授業案検討を行った。全職員で校内研修で授業案検討を重ねた。授業は、跳び箱の屈伸跳びの授業。発展技であるため、どのくらいの生徒が習得できるか未知数の授業であった。授業者も言った、「だれもできないかもしれない」と。しかしそこには、「見た目には派手さはないが、やってみると難しい。でも、ポイントを見つかることで跳べるようになるということ。そして、仲間と助け合ったり教え合

ったりしながら、課題克服に向けて取り組む楽しさ。これらのことを授業で体験させたい」という授業者の熱い思いがあった。本校の研修の柱となる「単元を貫く問い」と、「本時の問い」を中心に授業案検討を行った。3年B組の生徒の顔を一人一人思い浮かべながら、生徒はどんな反応をするか、どんな風に跳ぼうとするかをイメージした。検討に検討を重ね、中心発問は「屈伸跳びのポイントはどこにあるのだろう」となった。生徒の表れの予測は難しかったが、どんな授業になるのか、当日を迎えるのがとても楽しみであった。

「とにかくやってみたい！」

当日。4時間目3年B組の体育の授業は、いつも通りのスタートだ。チャイムが鳴る前に用具の準備やアップを素早く終える。挨拶の礼や準備体操の動きの糸乱れぬ様子は、さすが3年生。いや、どの学校の3年生にも負けない姿であろう。授業が始まった。「屈伸跳び」という初めての技に、生徒も疑問をもった。どうやって跳ぶのだろうか？初めは手探りの状態だったが、生徒はひっきりなしに跳び箱に向かって走り、技の習得に励んだ。「とにかくやってみたい！」「跳べるようになりたい！」みんながみんな、とにかく跳びまくる主体的な姿があった。そして、そこには教師の多種多様な支援が用意されていた。色々な高さの跳び箱やマットの準備、テレビでの動画視聴、生徒同士でiPad撮影、教師自らの手本のコマ送りの写真、声かけによる支援など。そして、教師の言葉は控えめだ。教師は必要な発問のみ伝え、あとは生徒同士がああでもないこうでもないで試行錯誤し、ひたすら練習に励んだ。そして、コツを理解し試そうとする姿がみられた。まさにこれが目指す生徒の姿であった。



教師はみんな「こんな授業がしたい」

教師になったとき、「こんな授業がしたい」と誰もが思う。しかしなかなか実現できない。中心授業を行ったベテラン教師は、「自分がしたいと思った授業をしただけ」と語った。そこには常に、体育科として目指す生徒の姿が明確にあった。つまり、日々の授業実践において、生徒にどのような教科の力を身に付けさせたいか、その教科の学習を通してどのような人になってほしいか、常に考えていられるからこそ、目指す生徒の姿が明確なのだと思う。中心授業を通して、新たな課題が見えてきた。来年度の校内研修では、さらに深い学び合いを目指していきたい。

「グラグラの種」ものがたり

東中学校 大杉 鏡康

脱「わかったつもり」の授業

東中学校は「わかったつもりの授業」ではなく、「わからない、なぜ？」と生徒が考えを深める授業をつくらうとしています。「どうしてこうなるのか不思議…」「他の班はぼくらと違う考えだ…気になる」「どうすればうまくできるかな…」「どうせ〇〇でしょ…あれ、違うの!？」こんなつぶやきをしながら、生徒たちが夢中になって学びを深めている授業をつくりたい、そんな願いから生まれたのが「グラグラの種」です。



グラグラの種とは？

グラグラの種とは、「教科における見方・考え方を働かせながら、『発展的』『総合的』に考えを活性化させて、生徒を深い学びに導く ICT 活用」です。GIGAスクール構想によって、タブレット端末が生徒たちに配付され、中学校の授業は大きく変わりました。

私たちは「生徒にわかりやすく説明するため」の ICT 活用だけではなく、「生徒がより学びを深めるために、生徒の思考を揺さぶる ICT 活用」を目指しています。今までのやり方を繰り返すだけでは、授業の質は変わりません。

そのために、何回も職員全員で話し合いました。疑問点もみんなで共有しました。

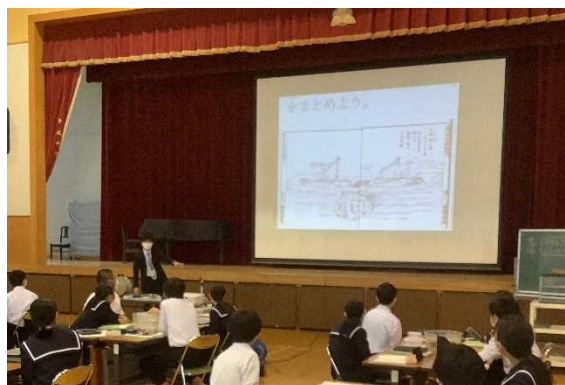
そして、グラグラの種を「共有」、「追加」、「メタ」の3つのカテゴリーに分類しました。



いざ、実践！

東中学校では、「1人1公開授業」という形で、同じ教科の職員が授業を参観し、授業改善につなげています。さらに、4月と10月に、中心授業を実施しました。10月31日の松下教諭の中心授業「運動とエネルギー 水中の物体に働く力」は、全職員で授業づくりを行い、外部から参観者を招いて実施をしました。

授業後に行われた事後研修では、生徒の思考を揺さぶり、深い学びを実現するためには「共有して終わり」ではなく、そこからいかに生徒が学びを広げ、深めることができるような手立てを打っていくかが話題の中心となりました。聖心女子大学の益川弘如先生は、研修に取り組む職員の様子をほめてくださっていました。



大切なのはこれから

本校は、来年度の11月に、掛川市のGIGAスクール研究指定校として、発表会を開催します。東中学校の「グラグラの種」ものがたりは、まだ始まったばかりです。実践を重ねたことで出てきた課題を克服していかなければなりません。「ミライシード」などの学習アプリは、無限の可能性を秘めています。瞬時の共有や資料の追加、自分や仲間の活動を客観的に捉える…。

グラグラの種がまかれ、「もっと知りたい!」「なぜ?不思議で仕方がない…」というあくなき探究心=「ワクワクの花」が咲くような授業づくりを、引き続き、職員全員で創り上げていきます。



生徒が主役の授業 ～自ら課題を解決する力の育成～

西中学校 横井 泰人

昔々あるところに、教師が50分間ひたすら“教え込み授業”を行っている学校がありました。

“生徒が主役として輝く学校”を合言葉とする西中学校では、その古い授業スタイルを撲滅すべく、“生徒が主役の授業”を目指してきました。その具体的な取組として『学習テーマの明確化』『課題解決のためのひと工夫』を実践してきました。一緒に覗いてみましょう！



1 時間目：理科「酸とアルカリを混ぜるとどうなるだろう」 ～自ら課題を解決する力の育成～

理科の授業では、洗剤に記された『まぜるな危険』の文字に着目し、なぜ混ぜてはいけないのかを追究していました。危険を伴うために、その実験を理科室で行うことができなくても、映像を用意することで、生徒たちの“解決したい”という気持ちが高まっていました。また、学習テーマを明確にすることで、自分なりの考えをもち、その考えを小集団での話し合いで積極的に交流していました。さらに、一人一台タブレットを情報共有や対話ツールなどとして活用し、西中学校の研修テーマ『自ら課題を解決する力の育成』に迫るひと工夫が、効果的に取り入れられていました。ここからどのような展開で単元が進んでいくのか...得意不得意に関係なく、どの生徒も前向きに取り組む“生徒が主役の授業”が始まりました。



2 時間目：技術科「リーフレタスに適した栽培方法は何だろう」 ～学習テーマの明確化～

技術科の授業では、「SDGs」と「最適化」をキーワードに、生徒が解決したくなる学習テーマを提示していました。充実した議論や思考につなげるために、本時で追究する課題を明確にしていました。それにより、生徒たちは『自分ごと』として学習テーマに向かい、実体験を生かしながら課題解決に取り組むことができていました。さらに、気温や照度などのデータ、技術科で大切にしたい見方・考え方を生かして、自分たちなりの考えをまとめていました。単に、適した栽培方法を選ぶのではなく、「こうした方がもっとよい方法になるのでは?」「このデメリットをなくすためには、こうすればいいよ。」などと、自然と「最適化」を追究する姿も見られました。一方で、生徒たち同士の議論にずれが生じて深まらない場面もありました。この授業を通して、生徒に学びを『委ねる』ための『ひと工夫』について考えることができました。



3 時間目：数学科『段数と伴って変わる数量の特徴にはどんなものがあるだろう』 ～課題解決のためのひと工夫～

数学科の授業では、『ひと工夫』として立方体の模型を用意していました。具体物を並べ、辺の数を数えることができるので、変化の特徴に気付きやすく、思考の手助けになっていました。特に、平面の図形や文字からではイメージするのが苦手な生徒にとって、実に有効な手立てでした。また、考えを深める『ひと工夫』として学習班で追究したり、Jamboard を用いて意見を紹介し合ったりしたことで、他者の考えをもとに自分の考えを深められていました。一方で、伴って変わる2つの数量を見つけ、式や表にするためには、50 分間には収まらず、考えを深め切れずにいる生徒もいました。生徒に『委ねる』ことを大切にしながらも、時間配分を考えたり、的確な条件制御を行ったりすることで、限られた時間の中で、より深い学びにつながるのではないかと思います。



4 時間目：社会科『私が裁判員だったら、どんな判決を下すだろう』～生徒が主役の授業～

社会科の授業では、模擬裁判を行っていました。教師は一切表に出ず、生徒が被告人や弁護士、検察官などの役職を決めて演じていました。さらに、その劇を踏まえて有罪か無罪かを考える際も、証拠をもとに活発な話し合いが行われていました。裁判員制度が導入され、3年後には自分が選ばれる可能性のある中学3年生だからこそ、『自分ごと』として考えられたのだと思います。一方で、有罪・無罪を考えるだけでは、この単元を通してつけさせたい『法律についての既習事項』が活かされずに終わってしまうため、量刑についても触れることで、より深く考えることができたのではないかとこの反省も得られました。つけさせたい力に目を向けた学習テーマの設定を行う大切さを再確認できました。



『働き方改革』掛川市指定研究校として

あっという間に西中学校の午前中の授業が終わってしまいました。西中学校は、『自ら課題を解決する力の育成』を研修テーマに、生徒が主役となって輝く授業を目指してきました。どの授業においても、生徒たちは課題を『自分ごと』として捉え、粘り強く課題と向き合い、主役となって輝いていました。

授業のみならず、この3年間の『働き方改革』の取組で、生徒会活動や行事の運営、部活動など、さまざまな場面で『生徒に委ねる』という、生徒の考えや思いを尊重した学校づくりを進めてきました。「生徒の考えを認め、生徒に委ねる」という生徒主導の学校教育へ、教育観の転換がなされてきました。主体的に活躍する先輩の姿を見て、後輩達も“自分たちでつくっていくもの”という感覚を持って活動することで、それが伝統となって引き継がれていくという、大きな変革を遂げました。

「探究」を通して未来へ一步踏み出そう

桜が丘中学校 川中 瑞貴

未来へ一步踏み出すために

予測不可能な時代。VUCAともいわれるこの時代では、急速なIT化・グローバル化によって、生活や働き方に大きな変化が生じると言われている。現代において「当たり前」な行動が、次の瞬間、当たり前ではなくなるかもしれない。「当たり前」や「常識」は存在しないと言っても過言ではない。言われたことをただやるだけの機械的な考えではなく、自ら問題意識をもち、考えて行動したり意見をもったりする「主体性」が求められているのである。「未来へ一步踏み出す生徒」の育成を目指している本校にとって、「主体性」は一步踏み出すための重要なエネルギーとなる。

探究学習

予測不可能なVUCAの時代を生きていくために必要な学習が「探究学習」である。探究学習では、自らの知識や世の中から集めた情報をフル活用しながら、個人、または集団でオリジナルの考えをまとめ、表現していく。まさに、現代に求められる力が身に付く学びのスタイルである。探究学習では「課題設定」→「情報収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」というプロセスを繰り返していく。本校では、総合的な学習の時間の中で、このプロセスを経験するための学習を取り入れ実施した。果たして、生徒たちはどんな探究の姿を見せてくれるのだろうか。

自分の興味・関心を具体化

探究において「主体性」を確保するためには、自らの「知りたい」と思う気持ちを大切にすることが必要である。そこで、まずは「自分の興味・関心」が何なのかを整理し、それらを具体化することにした。

すると、「なぜ校則は存在するのか。」「寝ているときに見る夢のコントロールは可能なのか。」「毎日掃除をするのに埃がたまるのはなぜか。」「なぜ流行はすぐに廃れるのか。」

「頻繁に忘れ物をしてしまう僕に良い改善策はないのか。」など、生徒たちは次々と頭に浮かんだ疑問を形にして



いった。自分の思いを熱心に語る姿は、探究の世界への素晴らしい第一歩を踏み出した瞬間であった。

とことん調べて考える

自ら知りたいと思ったことは、その思いがエネルギーとなり、調査・実験への歩みが加速する。そうなったら、とことん調べて考えてみる。自分が納得するまで、やりたいことができるまで行動してみる。本校生徒も、次々に新たな情報・結果を求めて走り続けた。「ホームセンターへ行って、実験の材料を買ってきました。」「先生方や全校生徒のみんなを対象にしたアンケート作ってみました。」など、生徒たちの圧倒的な行動力に驚かされた。また、GIGAスクール構想で一人一台ずつ配付されたタブレット端末もその効果を発揮する。情報収集はもちろんのこと、フィールドワークや調査・実験の実施・分析においても生徒を後押しする。信頼できる情報を根拠にして、どれだけ深く探究することができるのかが腕の見せ所である。

次に、集めた情報を分析し、まとめていく。「あれも使いたい。これも使いたい。」自分の力で必死になって手に入れた情報には、愛着すら湧いてくる。さらに、「あれ…。これって何だろう。」深く進んだ分、新たな疑問が生まれてくる。その疑問はさらなる深みへの手掛かりとなり、再び調査・実験へと繰り返し出ていく。ふと気付けば、学びの無限ループが完成していた。

表現することで生まれる新たな探究

最後に、一人ずつ級友の前で探究発表会を行った。これまで数か月間かけて取り組んできた成果を披露するとあって、生徒たちは良い緊張感に包まれていた。発表にはそれぞれのタブレット端末にあるプレゼンソフトを利用した。普段から授業や専門委員会活動などで積極的に利用してきたため、プレゼン資料の作成はお手の物である。発表会が始まった。生徒たちの様子を見ていて、まず印象に残ったのは、生徒たちの明るい表情である。自分の興味・関心があることについて語れる場面ということもあり、この瞬間を心待ちにしていたようだ。話し手の雰囲気按比例して、聞き手の雰囲気も明るくなっていく。いつしか、お互いに身を乗り出して交流をしていた。そして、教室にはお互いの「主体性」が溢れ、知らなかった世界への興味・関心が生まれていた。ここからまた、新たな探究が始まっていくだろう。



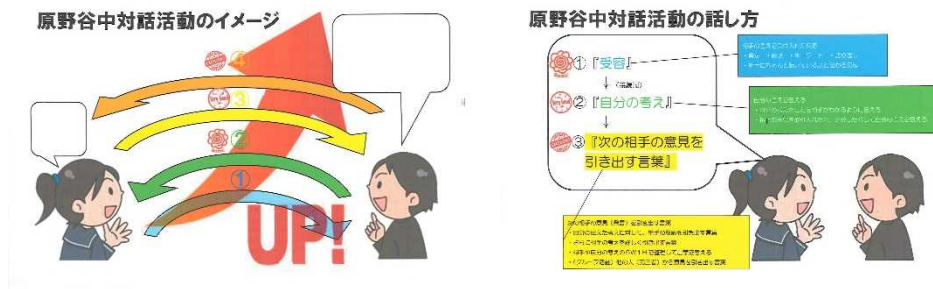
原野谷中は対話で創られている！

原野谷中学校 池田 直茂

原野谷中学校は対話にあふれています。朝の校門や昇降口、係活動、授業、部活動、そして下校のときまで、対話にあふれています。特に授業は「対話活動で互いを高め合える授業」をテーマとして、生徒と教師と一緒に授業を創っています。

対話のスキルアップ！ ～コミュニケーション活動～

「対話活動＝ただ話をする」…とと思っている人も多いと思います。原野谷中学校の対話活動は、下のイメージのように、相手の話を聞いて、そこからさらに相手の考えや思いを引き出す対話活動です。4月にはその姿をイメージする全校集会を行い、1年がスタートしました。



原野谷中の対話活動イメージ

また、毎週金曜日にコミュニケーション活動を行い、相手の考えや気持ちを引き出すスキルアップトレーニングを行いました。相手の言葉や表情を酌み取り、さらに相手の考えや気持ちを引き出す会話ができるようになりました。



コミュニケーション活動の様子

対話で深め合う授業 ～みんなで創る授業～

原野谷中の授業は対話で創られています。深める内容によってペア、小集団、班、一斉などいろいろな形で対話活動を行いました。また、iPadなどのツールを活用することで、自分の考えをより相手に理解してもらったり、みんなと共有したりすることができました。



授業の対話活動の様子

数学がわからない…でも大丈夫！ ～数学塾～

どうしても計算が苦手…でも今更聞けない…わからないのに友達や先生に質問するタイミングを逸してしまい悩んでいる生徒は意外に多いです。でも、原野谷中には「数学塾」があるから大丈夫です。

数学塾とは、そんな悩んでいる生徒に、地域の人や先生が個別で計算問題を中心に教えてくれる時間です。生徒一人ひとりの悩みやペースに合わせて、対話しながら学習を行いました。



数学塾の様子

地域とのつながり ～真冬のサマーフェスティバル～

原野谷学園
真冬の **SUMMER FESTIVAL**
12月17日(土)開催!!

●開催場所 原野谷中学校体育館
●開催時間 9:30~11:30

展示コーナー

- 原野谷学園みんなの作品展
- 原野谷中学校 部活動紹介
- 原野谷学園連携活動の紹介
- お仕事紹介コーナー～『酪農家さんの一日～牛と一緒に二人三脚』
- どうなる？原野谷学園 新たな一貫校

地域みんなで交流！
ポッチャ体験！
パラリンピックで有名な競技です。ルールは簡単、どなたでも楽しめるので、みんなが楽しめるのがポイントです。是非一度体験してみてください。

5の感謝祭もう一度！
演劇ライブ&映画一挙公開！！
10月21日(金)に原野谷中学校で開催された演劇祭。今年度は原口・兼井小学校も参加して、初めて原野谷学園として実施されました。コロナ禍もあり入場者数には限りがあり、すべてのライブ体験も見る事ができなかったのが残念です。是非、来年度お話を聴きに来てください。

防災について考えよう！
防災テント・ベッド体験コーナー～
毎年度の防災体験を考えたきっかけに、原野谷地区の防災に関する情報が盛りだくさん。当日は、防災テントとベッドが体験できます。実際のテントの広さは？ベッドの硬さは？実際に体験してみてください！！

共催：子ども育成支援協議会 原谷・原田まちづくり協議会
協力：原谷・原田区長会、掛川市教育委員会

子ども育成支援協議会が中心となってサマーフェスティバルを開催しました。当初は夏休みに開催予定でしたが、コロナウイルス感染拡大のため、冬に延期となり「真冬のサマーフェスティバル」というタイトルで実施しました。会場には児童生徒の作品の展示やポッチャが体験できるコーナー、防災について考えるブースもありました。当日は多くの小中学生や地域の方が来場し、地域の方との対話を通して冬の寒さに負けないぐらい熱く盛り上がりました。



ペタボードを楽しむ



部活動紹介などの展示も

対話は続くどこまでも！ ～来年度に向けて～

来年度も対話を継続します。授業では対話で深めた内容をまとめる活動を対話で行います。また、数学塾やサマーフェスティバルなどの地域との対話も継続していきたいと考えています。

自ら気付き 考えを深め 追究し続ける 北中生

北中学校 増田 裕子

大きく変化する社会に対応し、答えのない課題に対してもたくましく立ち向かい自らの道を切り拓き、地域・社会のために役立つ人になって欲しい。上記タイトルは、そんな力を育む授業を実践していきたいと考え掲げられた本校の研修テーマ。4月からの本校の積み重ねの成果が、生徒の様子から徐々に見えてきています。

まずは、学びに向かう土台作りから

生徒の学ぶ意欲を支援するための「寄り道相談会」。週末にある定期テストに関する質問を受け付ける時間です。教科担任に、授業の内容をより詳しく質問し、テスト勉強に生かそうと放課後の時間を使って開催されています。また、定期テスト前に行われる「プレテスト」が全4回ありますが、1回目よりも2回目、2回目よりも3回目と満点合格者が続々と増えました。「勉強すれば自分にもできる！！」そんな自信を得ることができている北中生がたくさん！！



家庭学習では、全校で一日2ページの「自主学习ノート」に取り組んでいます。学習内容は英語と数学を中心に、自分でやりたい勉強を見つけて実施します。「毎日コツコツやるのが勉強のコツ」。一日2ページの規定を超えて、数ページ実施して提出する生徒も！やらされる勉強よりもやりたい勉強をすることで、学力もついてきます。自ら課題を見つけて自分のために学習できる生徒が増えてきました。学ぶ楽しさにつなげられ、さらに学習意欲がアップしていることを願います。

どうしたら、おいしいリーフレタスができるの？

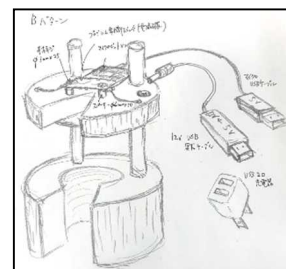
2年生の技術科の授業です。「木材加工」「生物育成」「情報」「エネルギー変換」の内容を複合させた学習教材を岡田教諭が考案しました。リーフレタスを水耕栽培するための栽培装置を設計し、テープLEDを使って照明装置の配線を考え、おいしいリーフレタスを作るための照度や時間をプログラミングした制御スイッチを栽培装置に組み込んでいきます。

最初は、LEDの光をずっと当て続けてリーフレタスを栽培してみました。テープLEDの配線には苦労しました。一部だけ点灯しなかったり、過電流になってしまったり。どうしたら、適切な配線になるのか、友達同士で改善案を出し合い学習してきました。そんな苦



労があった分、リーフレタスが日に日に育っていく姿に感動する生徒たち。

いよいよ収穫の日。リーフレタスを食べてみると・・・。「あれ？苦い？」「なぜだ？」「どうすればいいの？」原因を追究していきます。照度の強さや照度時間、光の配置、養液の与え方など、様々な視点でおいしいリーフレタスを作るための条件を探っていきます。そして、適切な照明になるようにプログラミングにより栽培装置を改善していきました。そして2回目の栽培にチャレンジ！！このチャレンジは、来年度、3年生で実践する予定です。自分たちの追究意欲のもとに研究されたリーフレタスの味はきっと抜群なはず！！来年度の授業を楽しみにしている北中生です。



生徒も教師も学び合うことを大切に

感じたこと、考えたこと、ひらめいたこと、理解できたことは、言葉にすることで、より深い理解や学びにつながります。研修テーマにある「考えを深める」とは、仲間とともに対話を通して学びを深めることでもあります。考えを深めるためには、まずは個々に考えを持つことも大切です。一人ひとりが考えを持つことができるように、適切な資料を与えたりiPadの活用や友達に教えてもらう場を設定したりして、個々の思考力や解決する力を伸ばせるように、教師も授業の中で意識して工夫してきました。生徒同士で活発に意見を言い合う場面も増え、学びに向かう北中生のたくましさを感じます。



先生方の研修会も学び合いです。本年度は、異年齢・異教科の3～4人でグループを組み、互いの授業を見合って学び合う研修スタイルで行いました。若手はベテランの先生から学び、ベテランは若手の先生から刺激を受け、授業力向上に向けて研修しました。生徒の姿から、個々の授業の課題を見出し、より学力をつけるための授業方法について検討していきます。教科間のつながりを再発見したり、授業の基礎技術について学び合ったりすることができました。



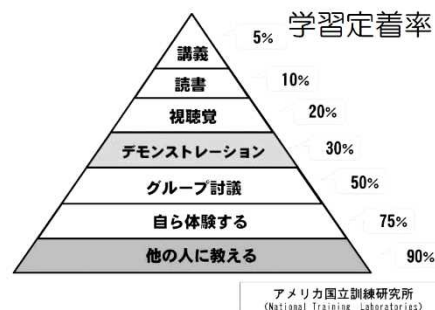
北中の体育前には、地域の偉人である岡田良一郎の銅像が私たちのことを見守ってくれています。今後も、生徒がより学ぶ意欲を持ち続け、岡田良一郎のように地域のために貢献できるような子どもたちを育てていきたいと思ひます。

アウトプット物語！～発信から発進へ～

城東中学校 研修推進委員会

なぜアウトプット？

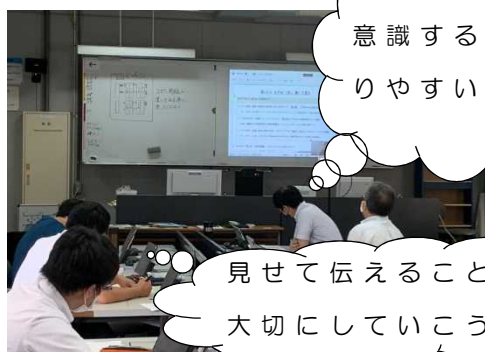
変化が激しく、予測困難な未来を生き抜くために、知識・技能を暗記・習得していくインプット型の教育から、知識・技能を活用・表現していくアウトプット型の教育への転換が求められています。また、ラーニングピラミッドでも、「他の人に教える」などのアウトプット型の学習活動の方が、学習定着率が高いと言われています。（右図参照）



そのため、本校では研修テーマ「対話を通して考えを深める授業」に向けて、対話や教え合いなどのアウトプット型の学習を重視した研修を行ってきました。

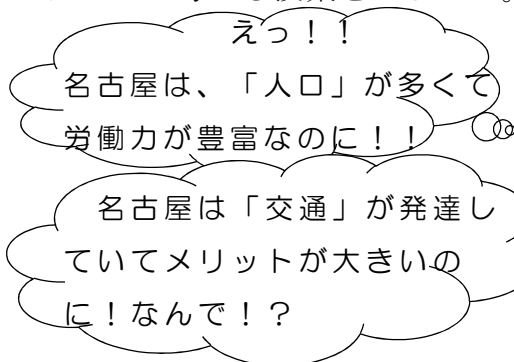
社会が求めるアウトプットとは？

夏休みの校内研修では、大企業の社員研修や社会人教育に携わる、浅田すぐる先生に、ズームで「社会（企業）が求めるコミュニケーション力」について、講演してもらいました。社会では、わかりやすく伝える力が求められており、伝える内容をわかりやすく整理する思考整理術を学びました。講演で学んだアウトプット方法を、授業や校務分掌、生徒会活動などで活用しました。



授業でアウトプット①（社会科の実践）

「中部地方のどのような場所に、スマートフォン工場を建てたらいい？」という課題について、自然環境・人口・交通・産業の視点を分担して調べ、それをアウトプットして教え合うことで、視点を4つに広げ、多面的にスマートフォン工場建設について考える授業をしました。



授業でアウトプット②（国語科の実践）

『竹取物語』の「蓬莱の玉の枝」の学習では、細部の描写に着目し、人物の行動や心情を捉え、古典の世界に親しむ言語活動を設定しました。「5人の求婚者の中で誰が一番愛情深いのか」を学習課題に個人で考え、班で話し合い、班の意見をムーブノートで提出させることで全体に共有させました。下の写真の意見のように、求婚者それぞれの行動を根拠に意見を出していました。授業後も、「そこまで、人々に好かれるかぐや姫はどんな人なのだろう。」「今も昔も、誠実な人がいいなあ。」など楽しく会話をする姿が見られました。

くらもちの皇子は、うそをついてまで結婚しようとしたから愛情深いんじゃない？

ごまかすのは本当の愛情ではないよ！
竜の玉を自分で取りに行く方が愛情深い！



総合学習（防災）でアウトプット

3年生は、4月から、HUG学習や防災講話など、防災についての学習を行いました。そして、知識を深めるだけではなく、調べたりまとめたりしたことを下級生にアウトプットして共有することで、1・2年生も防災についての関心をもつきっかけを作りました。

断水の際は、トイレも使えません！



非常用トイレも用意した方がいいね！

学習の振り返りから、防災に対する知識や理解の定着を感じるとともに、1・2年生の中にも、発表を聞いて家族と話をした生徒がいたことから、さらなるアウトプットにつながり、防災意識を広めるいい機会となりました。

全国に向けてアウトプット！

～ 第2回全国城東中サミット～

令和4年2月28日（月）に「第1回全国城東中サミット」を開催しました。本校が総合司会を行って、全国にある「城東中」とオンラインでつながり、「学校紹介&地域自慢」について話し合いました。

今年度は、令和5年1月24日（火）に高知県城東中学校がホスト校となり、第2回目が行われ、学級ごと全国の城東中と交流し、学級や本校の良さを全国にアウトプットすることができました。

このように、アウトプットを重視した様々な教育活動を行い、生徒の学習の理解や伝える力、コミュニケーション力を高めていきました。今後は、自分から積極的に発信していく「主体性」を高めて、更なるレベルアップを目指していきます。

生徒同士の関わり合いは学び合い

大浜中学校 池谷 貴弘

「聴く・訊く」が考えを深めるきっかけ

生徒の学習に対する意識付けを行うために、4月の集会で学習担当から話をしました。授業の話合いの中で様々な意見に触れ、考えを広げたり多面的・多角的に考えたりできる「対話」と「協働」のある活動を繰り返すことで、より良い学びができることを生徒に伝えました。

「聴く」から「訊く」、そして表現へ

1年間で3つのステップに分けて「聴く」態度を育成することを目指しました。

Step 1 「聴く」姿勢を意識する 【第1ステージ】

- ・相手の立場や意見を尊重する
- ・自分の考えと比べながら聴く

Step 2 表現する 【第2・3ステージ】

- ・自分の意見を持ち、相手に伝える
- ・相手の話を聴き、疑問に感じたことを訊く

Step 3 工夫して表現する 【第4・5ステージ】

- ・相手の意見を基に、より良い考えをもつ
- ・状況や目的に応じて適切な方法で相手に伝える



4月の授業始めに教科ガイダンスを行い、生徒が身に付けたい資質・能力の説明や教科や単元における観点・評価の規準等を提示して、生徒自らが何を学べば良いかを把握し、学びに積極的に活かせるようにしています。

学びを深めるためのICT活用

生徒の思考力や判断力、表現力などの育成を目的に、意見交換や発表などの場面で積極的にICTを活用させています。相手の考えや意見をすぐに誰でも確認できる利点を生かし、意見交流や情報共有、共同制作の場面で相手への伝わりやすさを意識して、様々なレポートや作品を作っています。このような思考の共有や練り合い



により、生徒一人一人の考えや意見が磨かれています。



学びを深めるための協働学習

協働学習により友人との対話を通して、意欲的に授業に参加することができます。「わからない。」「教えて。」「ここってどうやるの？」など集団内での交流は、人を思いやる行動や合意形成の大切さを知るとともに、他者の意見と触れる機会が増えることで、自分の意見を見つめ直すことにもつながります。さらに繰り返し、集団で問題に当たることで仲間との協力が自然と行われ、「〇〇さん、お願い。」「これはやっておくね。」など集団の中で自らの役割を見いだしていくことができます。単に正解、不正解にこだわるのではなく、問題解決までの手順や思考力が磨かれていきます。



生徒も教員も日々勉強

教員一人一人もより良い授業を目指して、勉強をしています。研修グループを作り、全員が公開授業を行い、お互いの考えや経験を共有、練り合うことで、授業改善につなげています。今後も生徒の学力向上につながるように、教員も授業力向上に励んでいきます。



生徒の「主体性」を引き出すために

大須賀中学校 鈴木 健吾

「主体性」を引き出すためには

「生徒の主体性をもっと引き出す授業をつくろう！」

令和4年度の大須賀中学校は、全教員がこの目標に向かって授業づくりを進めてきました。生徒たちの「学びたい」という意欲を引き出すためには、生徒が見通しをもち、学ぶことに対して必要感を感じる仕掛けが不可欠です。その仕掛けを生み出すために、1つ1つの授業がぶつ切りで終わるのでなく、授業と授業とがつながりをもち、単元の終末に生徒が「やってみたい」と思う学習活動を設定すること、すなわち、生徒が主体的に学びに向かうための指針となる「単元を貫く課題＝軸」を練り上げていこうと考えました。

「単元を貫く課題＝軸」を練り上げよう

授業は毎時間50分間で行われるものですが、50分間で完結するというわけではありません。1時間目は2時間目につながり、2時間目は3時間目に・・・というように、1時間1時間が単元を形作ります。生徒は単元の中で学びを進め、単元ごとのゴールに向かっていくこととなります。そのゴールをいかに魅力的なものにできるか。そして、いかに「必要感」や「やってみたい」という気持ちを生徒たちから引き出すことができるか。生徒たちのそんな主体性を引き出す単元をつくるために、4月から校内で研修を進めてきました。研修では、異なる教科の教員から多様なアイデアが飛び出し、単元を貫く軸を生み出すことの難しさとおもしろさを体感しながら、単元を構想することができました。



10月には「授業公開DAY&WEEK」と称して、期間中いつでも授業を参観に行ける期間を設けました。同じ教科だけでなく、他教科の授業を参観することで、新しい気づきやアイデアを共有できたり、いつもとは異なる視点からアドバイスをもらえたりする貴重な学びの機会となります。6月と10月には、それぞれ英語と理科の中心授業を実施し、本年度から新たに進めている単元構想について授業後検討会を行い、良かった点や改善点を出し合うことで、実りある研修とすることができました。

「主体性」を引き出す環境づくり

大須賀中学校では、2学期開始時から、より一層ペアや小集団での学び合いや話し合いが活性化するように、教室の座席を「コの字型」隊形にしました。これにより、級友の顔が見やすくなり、従来の前向き隊形よりも話し合いが活発に行われるようになりました。また、あるテーマに沿ってトークをする「コミュニケーション活動」を週に一度行っていて、より良い話し手、聞き手となることを意識し、受容的な雰囲気をつくっています。このような環境づくりも生徒が主体的に学ぶために一役買っています。



「主体性」をもっと引き出そう！

「単元を貫く課題」を意識した単元構想づくりは、我々教師にとっては「生みの苦しみ」を伴うものでした。しかしながら、その分生徒は、「なぜ学ぶのか」ということを今まで以上に意識し、「もっと学びたい」という思いや「学んだことを伝えたい」という思いをもって学習を進めていくことが



できたと思います。本年度大須賀中学校が進めてきた「単元構想づくり」は、どの教員にとっても大きな意義のあることでした。

大須賀中学校の教員は、「もっともっと生徒の主体性を引き出したい！ 引き出さなくては！」という思いに溢れています。令和5年度は、魅力ある単元構想づくりをさらに練り上げていくことはもちろんのこと、授業の「まとめ」や「振り返り」に焦点を当てて、生徒がさらに主体的に学習に取り組むことができる授業づくりを進めていきます。

